

II 本園の変遷と本質的価値

1. 文化財指定の概要

本園は、文化財保護法第109条第2項に基づき、特別名勝及び特別史跡に指定されたものである。本園について、芸術上及び観賞上の価値、歴史上及び学術上の価値を整理するため、本園の指定に関する事項を以下に示す。

1-1 指定に至る経緯

本園は、徳川将軍家唯一の別邸であり、潮入式の池泉を有し、江戸時代の大名の庭園の特色である回遊式庭園の様式を現代に伝える代表例である。

大正12(1923)年の関東大震災、昭和19(1944)年及び同20(1945)年の空襲により園地や園内の建築物が破壊され、本園は荒廃した。昭和20(1945)年に東京都に下賜され、応急的な整備を行い、翌年4月に都立の庭園として一般に公開されることとなった。

本園は、その芸術上及び観賞上の価値、歴史上及び学術上の価値により、史蹟名勝天然記念物保存法に基づき、昭和23(1948)年に名勝及び史蹟に指定され、更に、昭和27(1952)年には文化財保護法に基づき、特別名勝及び特別史跡に指定され、今日に至っている。

1-2 指定告示

本園の文化財指定の経緯を以下に示す。

(1) 名勝及び史蹟

① 指定年月日

昭和23年12月18日

② 指定名称

旧浜離宮庭園

③ 指定面積

75,357坪10

④ 指定説明

此の地はもと蘆葦叢生し、将軍家鷹狩の場所であったが、後ち松平綱重の別邸となり、甲府浜屋敷、海手屋敷と言われた。ついで徳川家宣はこれを収めて浜御殿と改称し、大いに改修を行い、茶屋、仏堂、大手門等を設け景観を整えた。爾来将軍の別邸となり、鴨場も設けられたが、又園内に織殿、菜園、火薬所、大砲場等も営まれた。

此の間享保年間炎上、一時荒廃したが、家斉は大修理を施して再び茶屋等を設け整備するところがあった。慶応二年海軍奉行の手に移り、石造洋館の延遠館が建てられたが、維新後は上地され、明治三年に宮内省の移管に属し、爾後浜離宮として大いに苑池を整え、宴遊の地に充てられた。明治天皇は賜宴等に屢々行幸せられ、大正天皇も行幸になった。明治十二

年グランド將軍来朝の際、延遼館を迎賓館に充て、明治天皇が同八月十日中島御茶屋に於て引見せられたことはよく世間に知られている。

延遼館は一時外務省に充てられたこともあったが、明治二十二年取毀され、大正十二年の大震災は大手門等焼失し又今次の戦災によって御茶屋は総て炎上し、樹木、橋等に若干の被害があったが、苑池はよく旧規模を止め、昭和二十年十一月三日東京都に下賜された。庭園は周囲に海水を繞らした菱形をなし、ほぼ北庭と南庭とに分ち得る。北庭は旧延遼館に属したものであって、芝生には山や細流を配し、簡素な明治時代の庭園であって、南庭は大泉水を中心として作られ、これに海水をたゞへ潮の干満により庭趣に変化を生ずる。東部と西部とに各々鴨池を設けて鴨場となし、東北部に鉤形の船着場が築かれ、海に通じて船舶の発着に便し、西北には馬場があつて馬技が演ぜられた。

東南部は海面に接し、品川湾に浮かぶ台場と房総の山々を眺め、西南部に位置する富士見山からは、西方遙かに富士の秀峯を望む。

かように江戸庭園の特徴を良く存在して居り、かつ潮入の池として典型的なものであつて、江戸時代に発達した大名庭に属する代表的庭園である。

(2) 追加指定

① 指定年月日

昭和 27 年 3 月 29 日

② 指定名称

旧浜離宮庭園

③ 追加内容

海面 50 間、河川 10 間の周囲水面

この坪数計、22,808 坪 47 の水面地域が追加指定せられた。

尚この時期の都の希望条件、

この水面に

1. 船舶の自由に仮泊
 2. 護岸工事は任意施行出来ること
- が盛り込まれた。

(3) 特別名勝及び特別史跡

① 指定年月日

昭和 27 年 11 月 22 日

② 指定名称

旧浜離宮庭園

③ 指定面積

98,160 坪 57 (324,497.74 m²)

④ 指定説明

もと徳川將軍家鷹狩の場所であつたが、後松平綱重の別邸となり甲府屋敷、海手屋敷と言

Ⅱ 本園の変遷と本質的価値

われた。徳川家宣が大改修を加えて、浜御殿と称し、爾来將軍家の別荘となった。明治3年宮内省の所管に移り浜離宮と称し皇室宴遊の地となった。昭和20年戦災にかかって御茶屋等の建物はすべて炎上したが苑池はよく旧規を保存することを得た。

北庭及び南庭に分たれ、南庭は海水たたえた大泉水を中心として景観を整え、また東部及び西部にそれぞれ鴨場を設け東南部、品川湾を越えてお台場と房総の山々、富士見山から西方遙かに富士山を望む等江戸大名庭園の特色をよく保存している。殊に江戸に広く行われた潮入の庭として最も典型的なものである。

1-3 指定範囲

本園の文化財指定範囲及び指定面積等について以下に示す。

住 所 : 東京都中央区浜離宮庭園 1-1

指定面積 : 324,497.74 m²

公有地化面積 : 250,165.81 m²

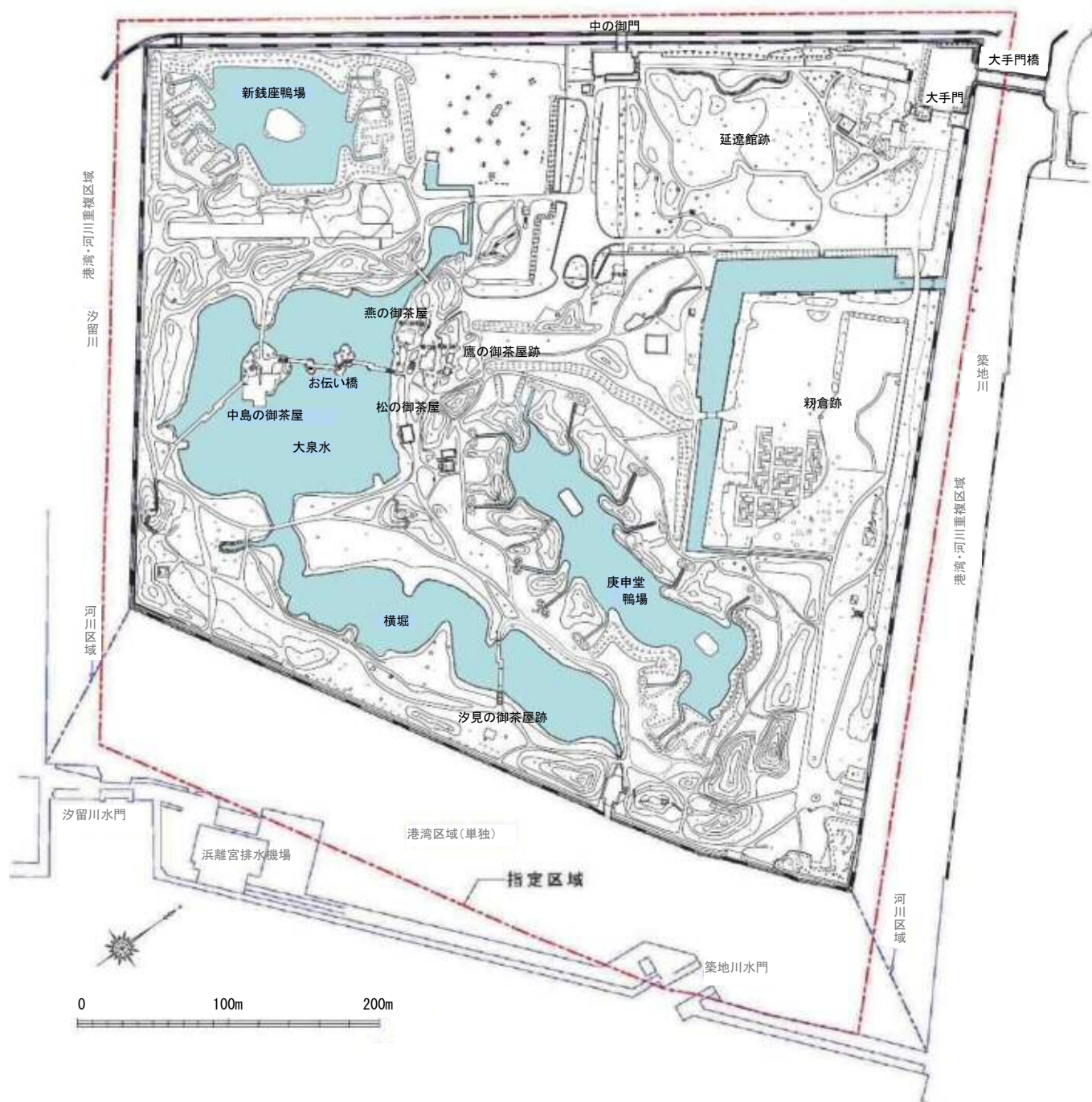


図 2-1 指定範囲図

2. 本園の変遷

本園の価値を把握するため、本園の歴史の変遷及び周辺環境の変遷を以下に整理する。

2-1 歴史の変遷

本園の歴史は、将軍の鷹狩の場であった場所を、承応3（1654）年に松平綱重が埋め立てて屋敷としたことに始まる。4代将軍家綱の時代に将軍家の別邸となり、歴代将軍が舟遊びや鷹狩を楽しみ、公家や僧侶等を接待する場所として使われた。明治に入ると皇室の離宮となり、外国貴賓の接待や皇室行事の場となるなど重要な役割を担った。その後、大正12（1923）年の関東大震災、太平洋戦争の空襲と、2度の大きな被害を経て、昭和20（1945）年に東京都に下賜され、翌年、都立の庭園として一般に開放された。

史資料をもとに、創設から現在までの所有者及び名称の変遷を、表2-1に示す。

表2-1 旧浜離宮庭園の所有者及び名称の変遷

| 時代 | 時期 | | 所有者 | | 名称 |
|----------|----------------------------|-------------|------------|-------------|---------------|
| 江戸 | 承応3頃-宝永元年 | 1654頃-1704年 | 松平家 | 松平綱重(甲府宰相) | 甲府屋敷 海手屋敷 |
| | 宝永元年-宝永6年 | 1704-1709年 | 将軍家 | 松平綱豊(のちの家宣) | 浜御殿 |
| | 宝永6-正徳2年 | 1709-1712年 | | 6代:家宣 | |
| | 正徳3-享保元年 | 1713-1716年 | | 7代:家継 | |
| | 享保元年-延享2年 | 1716-1745年 | | 8代:吉宗 | |
| | 延享2-宝暦10年 | 1745-1760年 | | 9代:家重 | |
| | 宝暦10-天明6年 | 1760-1786年 | | 10代:家治 | |
| | 天明7-天保8年 | 1787-1837年 | | 11代:家斉 | |
| | 天保8-嘉永6年 | 1837-1853年 | | 12代:家慶 | |
| | 嘉永6-安政5年 | 1853-1858年 | | 13代:家定 | |
| 安政5-慶応2年 | 1858-1866年 | 14代:家茂 | | | |
| | 慶応2-3年 | 1866-1867年 | 15代:慶喜 | | |
| 明治 | 明治元年 | 1868年 | 朝廷 | | 浜園 |
| | (旧)明治元年8月 | 1868年 | 軍務官 外国官 | | 浜殿 |
| | (旧)明治元年11月17日 | 1868年 | 東京府 | 延遼館 | |
| | (旧)明治2年5月 | 1869年 | | | 外国官(のちの外務省) |
| | (旧)明治2年9月14日 | 1869年 | | | 外務省 |
| | (旧)明治3年10月23日 | 1870年 | 宮内省 | 延遼館 | 園地は宮内省、建物は外務省 |
| | 明治7年1月28日 | 1874年 | | | 宮内省 |
| | 明治17年4月30日 - 明治23年4月 | 1884-1890年 | | | 浜離宮 |
| 大正 | 明治23年4月 - 昭和20年11月3日 | 1890-1945年 | | | |
| 昭和 平成 | 昭和20年11月3日 - 昭和21年3月31日 | 1945-1946年 | 東京都 | | |
| | 昭和21年4月1日 - | 1946年- | | | 浜離宮恩賜庭園 |

明治元年以降で、(旧)とあるものは、旧暦による日付を示す。明治6年以降は、新暦による。

本園の歴史的変遷を、所有者や特徴的な事象を踏まえ7つの時代に区分した。時代ごとの変遷と特徴的な事象を表2-2に示す。

表2-2 本園の時代区分

| | 時代 | 時期 | 所有者 | 特徴的な事象 |
|---|------------|------------|----------------------------|---|
| 1 | 甲府屋敷の時代 | 1654頃-1704 | 甲府宰相松平綱重 | 海面を埋め立てる。 |
| 2 | 浜御殿時代Ⅰ | 1704-1716 | 6代将軍家宣（松平綱豊）－ 7代将軍家継 | 徳川将軍家の別邸となる。 庭園の骨格が造られる。 |
| 3 | 浜御殿時代Ⅱ | 1716-1786 | 8代将軍吉宗－10代将軍家治 | 作物の栽培、薬草の研究、 火術所等が設置される。 |
| 4 | 浜御殿時代Ⅲ | 1787-1867 | 11代将軍家斉－15代将軍慶喜 | 松・燕・鷹の御茶屋が完成する。 鴨場で鷹狩が頻繁に行われる。 |
| 5 | 浜離宮時代Ⅰ | 1868-1890 | 朝廷、軍務官、外国官、 東京府、外務省、宮内省 | 延遠館が建設され、外国貴賓の 接待や皇室行事が行われる。 |
| 6 | 浜離宮時代Ⅱ | 1890-1945 | 宮内省 | 延遠館の解体後も皇室行事は継 続される。震災や戦災で御茶屋 や大手門渡櫓等が焼失する。 |
| 7 | 浜離宮恩賜庭園の時代 | 1945- | 東京都 | 東京都による管理となる。 |

1 甲府屋敷の時代

承応3（1654）年8月に、4代将軍家綱がこの地を弟の甲府宰相松平綱重に与え、綱重が埋め立てて邸地とした^{1) 注1)}。

この辺りは寛永年間（1624～1644）までは、図2-2の「武州豊島郡江戸庄図」のとおり葦の茂る将軍家の鷹狩の場であった。なお、後年に甲府屋敷が置かれたのは、実際には本図よりも東側（図2-2の下側）の本図には描かれていない海面上である。

敷地の埋立ては、図2-3の「増補江戸大絵図」において敷地の南側が「明地」（空地の意）となっていることから、北側から南側に埋め立てが進められたことがわかる。こうして、図2-4の「江戸図正方鑑」にあるように、現在とほぼ同じ形状の敷地ができあがった。

この間に敷地の中では、寛文4（1664）年に御殿が建てられ、更に、寛文9（1669）年11月、築山や池泉の造営に携わった反町武兵衛と玄斎が褒美を与えられた²⁾ことから、この頃には作庭が行われていたと推測される。

注1) 賜邸の時期については諸説あり、小宮山綏介の「二苑紀略」では、「御府内備考」の承応3（1654）年としており、これを採用した。

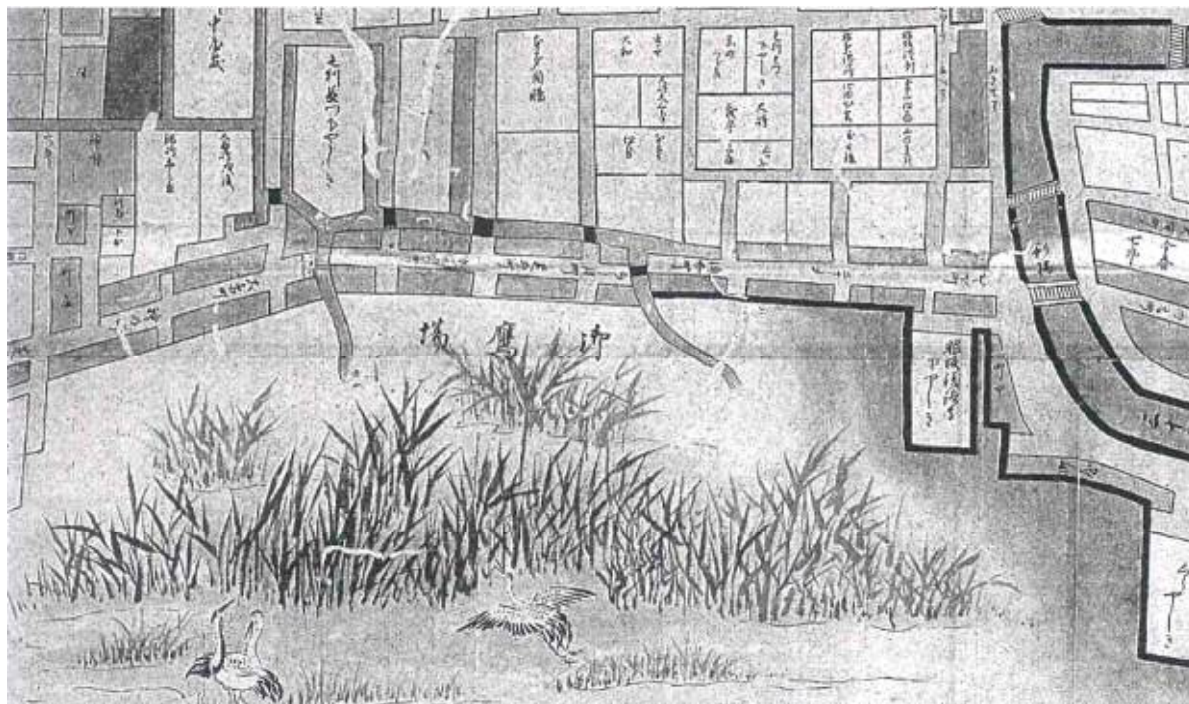


図2-2 「武州豊島郡江戸庄図」(寛永9(1632)年) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵



図2-3 「増補江戸大絵図」(天和2(1682)年) 国立国会図書館所蔵に加筆



図2-4 「江戸図正方鑑」(元禄6(1693)年) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵

2 浜御殿時代 I （6代将軍家宣－7代将軍家継）

「浜御殿時代 I」は、甲府宰相松平綱重の子である綱豊（のちの6代将軍家宣）が5代将軍綱吉の継子となってから、7代将軍家継の治世までの、宝永元（1704）年から享保元（1716）年の13年間とした。

本園は、宝永元（1704）年に綱豊が綱吉の継子となり名を家宣と改めたことで、「浜御殿」と呼ばれるようになった³⁰⁾。宝永4（1707）年には浜御殿預り（のちの浜御殿奉行）が置かれ¹¹⁾、宝永6（1709）年に家宣が6代将軍となったことから、「浜御殿」は徳川将軍家の別邸となった。

苑池の遊覧を好んだ家宣は、宝永4（1707）年、中島の御茶屋、海手茶屋（汐見の御茶屋）、清水茶屋、観音堂、庚申堂、大手門を建て、その他に幾つかの橋を設けた¹¹⁾。図2-5の「浜御殿地絵図」では、敷地のほぼ中央に御殿があり、それ以外に大泉水や横堀、中島の御茶屋、海手茶屋、観音堂、庚申堂、稲生神社、馬場等が確認できることから、この時代に庭園としての骨格が整えられたことが分かる。

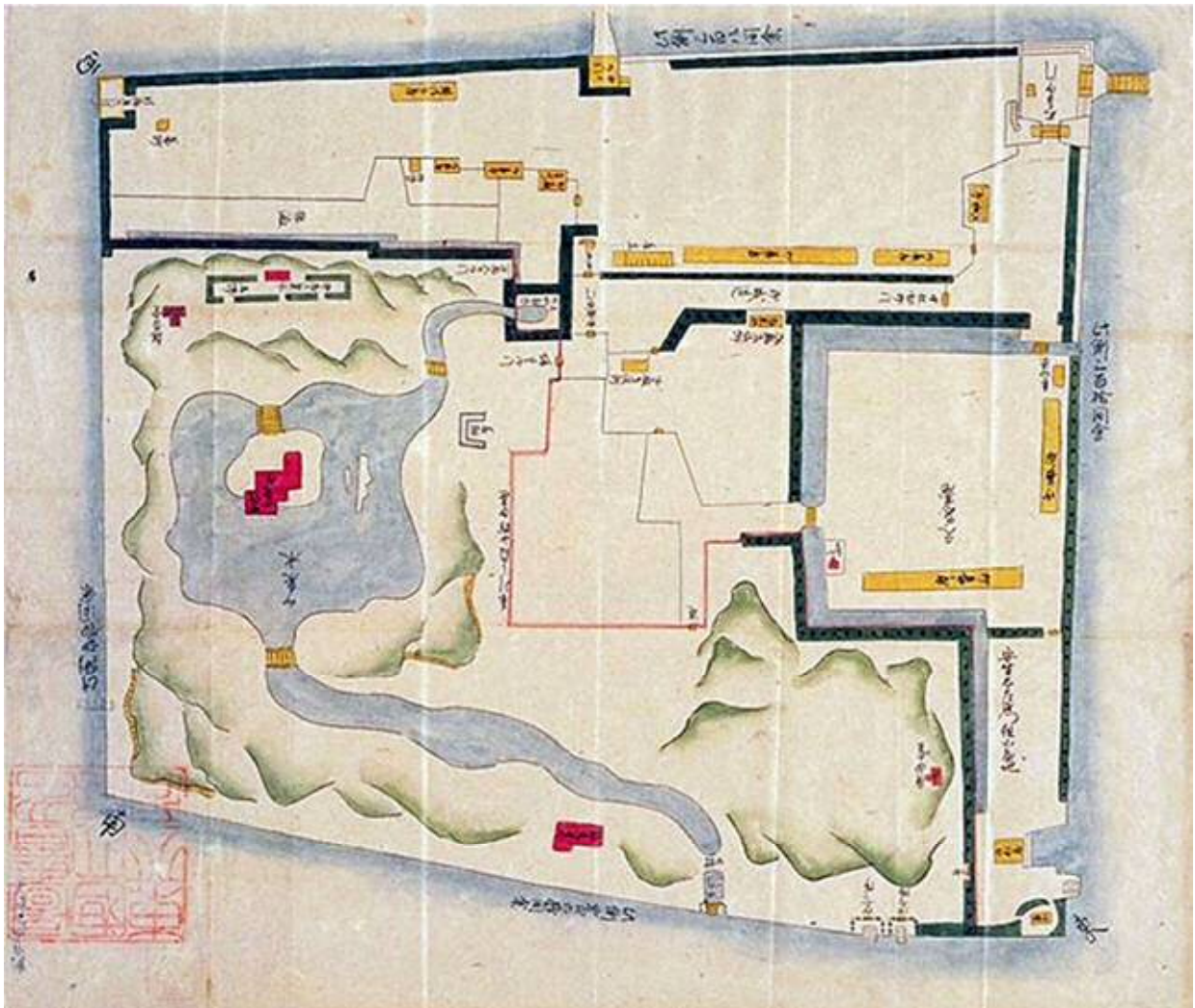


図2-5 「浜御殿地絵図」東北大学狩野文庫所蔵

図の時代については、中島の御茶屋等が出来た宝永4（1707）年以降、御殿が焼失した享保9（1724）年までの間と推測できる。

庭園の利用

6代将軍家宣は度々本園を訪れ、ある時は舟遊、鼓吹、囃子などを楽しみ、ある時は新造船を上覧し、ある時は乗馬を楽しんだ³²⁾。また、園内には水田があり、関東村より農家の婦女を呼んで早苗を植えるところを奥方や姫君達と観覧した⁴⁾。

宝永6(1709)年5月に、近衛左大将家久卿(家宣の義父)が遊覧した際には、中島の御茶屋で茶菓を供し、書院にて饗応し、清水茶屋では饗膳でもてなしている⁴⁾。同年9月には、将軍が御台所や側用人達とともに船を観賞し^{4) 12)}、10月には准后公弁法親王を招いて船遊びを楽しんだ¹²⁾。

「文昭院實紀附録」には、宝永7(1710)年9月に公卿達が本園を訪れ、和歌を詠んだ記録がある⁶⁾。これらの和歌からは、当時の浜御殿は、浜辺の波や風を感じられる場であり、松が修景的に植えられていたことがうかがえる。海から離れている京都の人々にとっては、浜御殿の庭が特別な景観として感じられたと推測される。

6代将軍家宣の時代は、本園は将軍が自ら遊覧して楽しむと同時に、乗馬など武芸鍛錬の場として、また、将軍が京都の公家や僧侶を招いて饗応した社交の場として使われた。

家宣の在職中は遊覧や接待が盛んであったが、7代将軍家継の在職中は将軍の御成りはなく、公家たちの接待も僅かであった³⁰⁾。

3 浜御殿時代Ⅱ（8代将軍吉宗－10代将軍家治）

「浜御殿時代Ⅱ」は、8代将軍吉宗から10代将軍家治の治世までの、享保元（1716）年から天明6（1786）年までの71年間とした。

吉宗は、「享保の改革」で幕府の再建を進め、米価と物価の安定を図るとともに、文武を奨励し、甘藷（サツマイモ）の栽培研究や商品作物の推奨など殖産興業に注力した³⁰⁾。また、これまでの御側御用人主導による政治を好まず、人事の刷新を行い、無駄な人員を大幅に削減した。幕府の財政の建て直しの政策は、浜御殿にも直ちに反映され、享保4（1719）年9月には、総勢137名いた役人を25名まで削減し、維持管理についても簡素化が図られた¹⁾¹⁵⁾。

享保9（1724）年、吉宗の治世に、火災により御殿をはじめ中の御門橋等、多くの建造物が焼失した。その後、享保17（1732）年、御殿跡には綱吉の側室であった寿光院、6代将軍家宣の側室であった蓮淨院尼と法心院尼が居住する「三尼の館」が建てられた⁵⁾。これも宝暦6（1756）年に火災で焼失し、以後、本園で御殿などの館が建設されることはなかった。

8代将軍吉宗の時代には、織殿、菓草園、製糖所、製塩所、鍛冶小屋、火術所、大砲場等が新たに設置された¹⁵⁾。更に、三尼の館の北東側（庚申堂の南側）の樹林であった場所には、田や畑、水路等が造られたことが、図2-6の「浜御殿惣絵図」より分かる。

図2-7の「濱之御庭（浜御殿関係図）」では池周辺に園路が描かれていることから、回遊式庭園として成り立っていたことがわかる。この回遊園路は、現在もほぼ同じ位置にある。

また、この時代は、老中松平定信が救荒に備えて籾倉を設置し、10代将軍家治が安永7（1778）年に「三尼の館」があった場所に新銭座鴨場を設けた^{11) 注2)}。

注2) 従来、この時に出来たものは新銭座鴨場と言われていたが、「浜離宮庭園における鴨場についての研究」⁴⁴⁾では、庚申堂鴨場であろうとされている。



図2-6 「濱御殿惣絵図」(享保17(1732)年頃) 江戸東京博物館所蔵

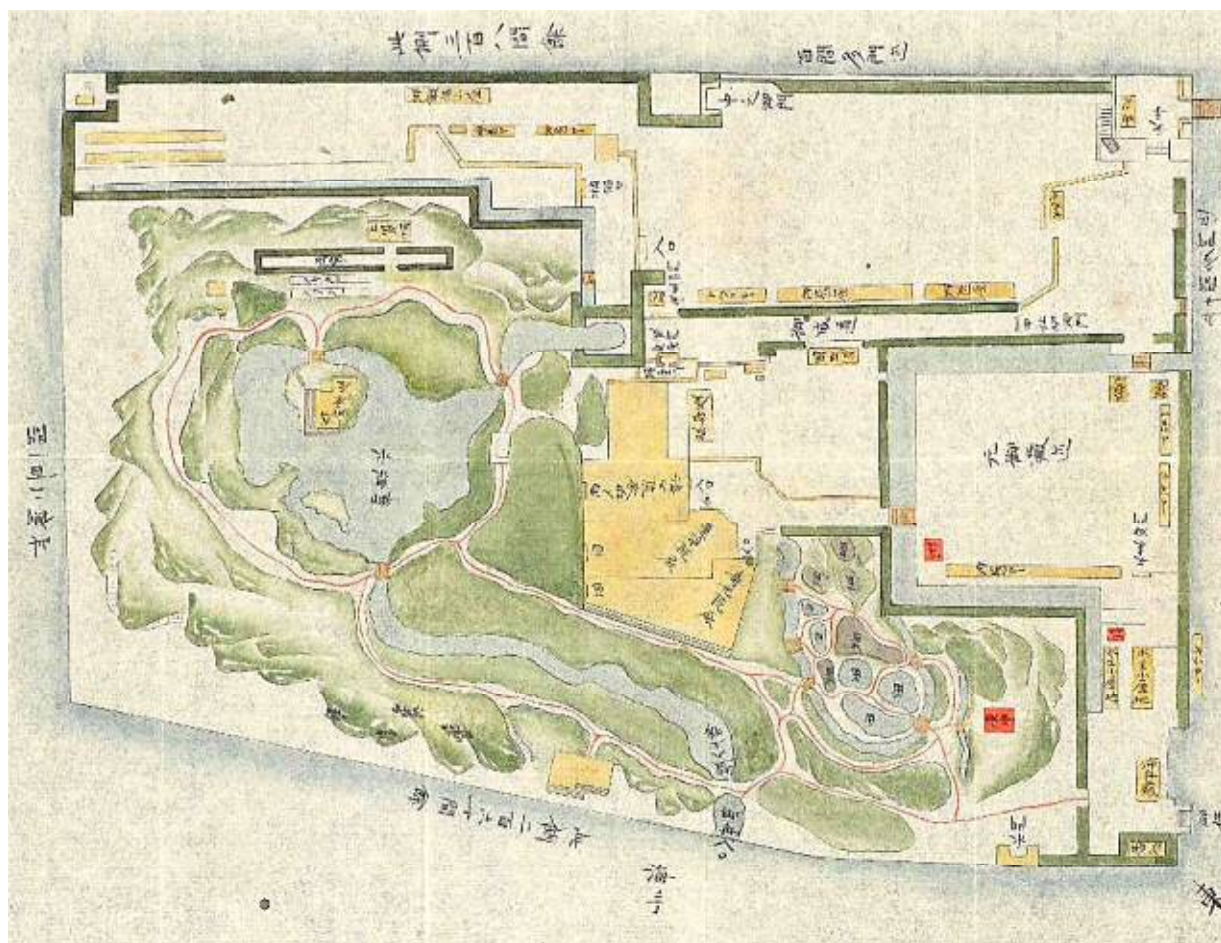


図2-7 「濱之御庭（浜御殿関係図）」 中央区立郷土天文館所蔵

図の時代については、「三の館」が建てられた享保17（1732）年から消失した宝暦6（1756）年の間と推測できる。

庭園の利用

8代将軍吉宗は在職中に4回の御成りがあり、苑池を遊覧したほか、騎射や漁を見た⁵⁾。本園は、吉宗にとっては単なる観賞の場ではなく、様々な研究を行う実用的な試験場であった³⁰⁾。薩摩から甘蔗（サトウキビ）の種子を取寄せて黒砂糖を栽培し³⁰⁾、各地から採集又は輸入した400種もの薬草を栽培した¹⁶⁾⁶⁾⁷⁾。また、新刀の鑄造、御家人による騎射の訓練¹⁵⁾、江戸城との間での狼煙^{のろし}の実験など軍事的な利用もたびたび行われた¹⁶⁾⁶⁾⁷⁾。更には、ベトナムから献上された象を飼った¹⁵⁾。

その後、9代将軍家重、10代将軍家治は、時々来訪するのみで、苑池に親しむことはほとんどなかった³⁰⁾。

4 浜御殿時代Ⅲ（11代将軍家斉－15代将軍慶喜）

「浜御殿時代Ⅲ」は、天明7（1787）年から慶応3（1867）年の、11代将軍家斉から15代将軍慶喜の治世までの81年間とした。

家斉の治世は、江戸時代の2つの大きな改革である「寛政の改革」と「天保の改革」のはざまにあって、文化文政（化政）時代といわれる享樂的な指向が強い町人文化が栄えた時代であった。

この時代の本園は、苑池での遊覧を好んだ家斉により観賞性と回遊性が強化された。潮入の池周辺には、燕の御茶屋、松の御茶屋、藁葺の茶屋（鷹の御茶屋）、お伝い橋、御亭山の腰掛、松原の腰掛、塩浜藁屋、新銭座東屋、樋之口東方の御山、藤棚等が設けられた³²⁾。図2-8の「御浜御殿ノ絵図」より新銭座鴨場と、横堀から分岐した鳥溜めを新たに設けたことが分かる。このように、従来の庭園空間に新たな意匠が加えられ、本園の歴史上最も充実した時代を迎えた。

天保5（1834）年に家斉が遊覧した際、目付の土岐頼旨主膳は、富士山や海原を遠く見渡す眺望や、築山の裾野の松、また、新銭座鴨場の池の周辺には草の生い茂る田園が広がり、お伝い橋には藤棚が架かり、潮入の池の周囲には松と芝生が植栽されていたことを書き留めている³⁷⁾。大泉水周辺に松が植栽されていたことは、図2-9の「浜の御苑之記」からも分かる。

また、天保13（1842）年に訪れた日野前大納言資愛は、池越しに立ち並ぶ松越しに見渡せる広々とした海に帆船が行きかう景色を気に入り、京都にはない海を借景とする潮入の池と、漁労の見物や釣りを楽しんだことを書き留めている²⁷⁾。

この時代の植栽は、御成門から潮入の池に至る道は常緑樹が繁り、潮入の池の周辺には、花木、山吹、楓、松、お伝い橋には藤などが植栽されていた。また、富士見山から塩焼所（塩浜）までの間の池のほわりには、芝生の中に松が植栽されていた³⁷⁾。

幕末になると、黒船来航により国内の政治は混乱し、大砲を設置して軍事訓練が行われるなど本園の様子は大きく変わった。東京湾に面した立地から軍事施設としての役割が重要視され、慶応2（1866）年に浜御殿奉行が廃止され、海軍奉行の所管となった^{22) 34)}。幕府は海岸防備のため、敷地南端にあった富士見山を移動させて砲台を整備するとともに、海軍伝習所として石室の建設に着手したが完成には至らず、明治維新を迎えた。

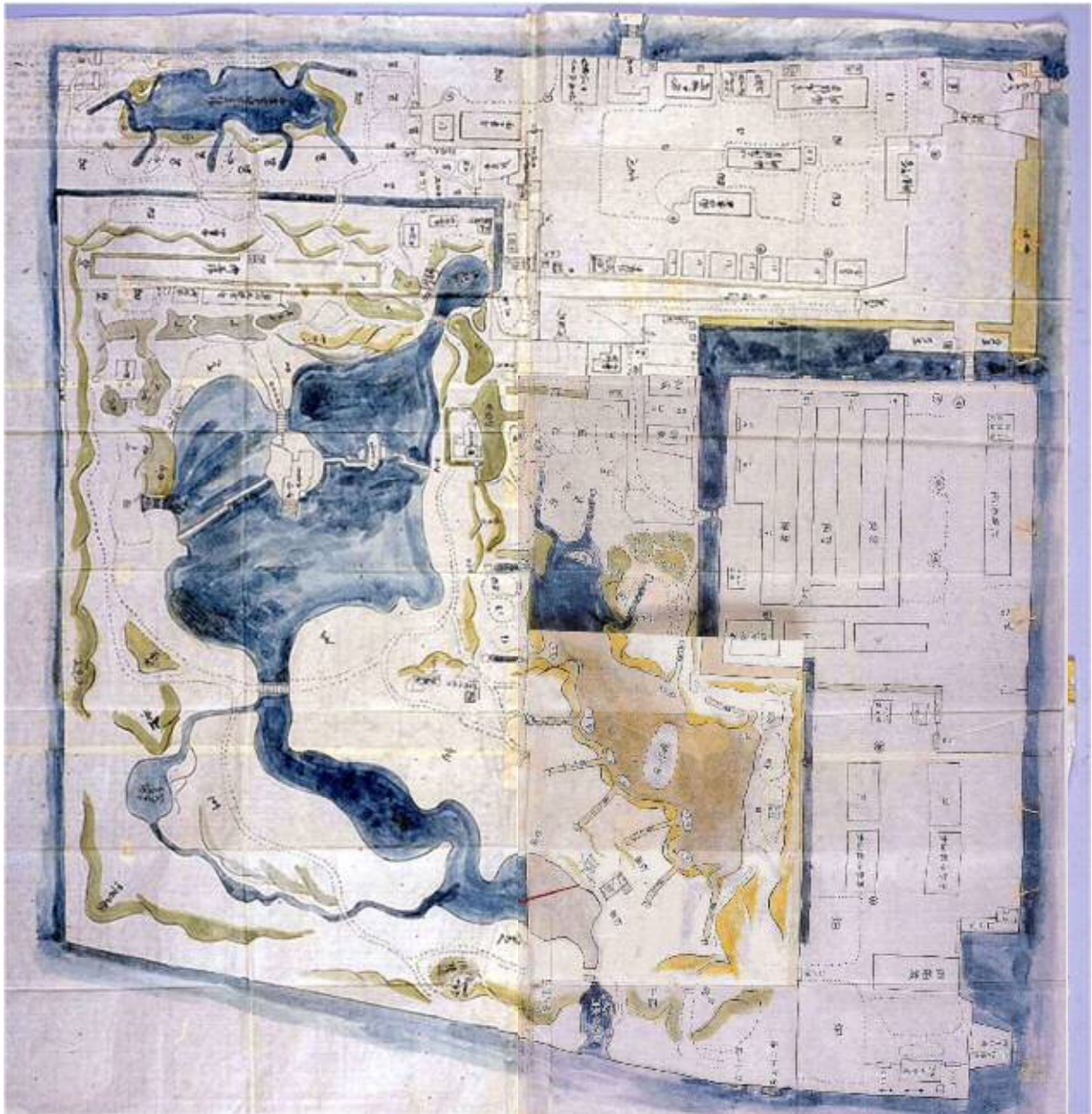


図 2-8 「御浜御殿ノ絵図」(寛政年間 (1789-1800) 頃) 徳川林政史研究所蔵



図 2-9 「浜の御苑之記」(天保 5 (1834) 年) 国立国会図書館蔵

庭園の利用

11代将軍家斉は、将軍在職期間中に頻りに浜御殿を訪れ、大いに庭園で遊んだ。享和2(1802)年7月には家斉は浜御殿から幕船天地丸に乗船し、芝浦沖の漁を観覧した⁸⁾。図2-10の「浜の御苑之記」には、大泉水で釣りを楽しむ様子や、海での漁の様子が描かれている。なお、この頃、普段は漁を禁止していたが、将軍の御成りの際には特別に許可していた。

家斉は、家臣とともに度々鷹狩をした。寛政7(1795)年に設けられた鷹の御茶屋は、鷹狩の際に休憩所として使用した場所であった(図2-9の左上の部分)。江戸時代、鴨場での鷹狩は社交行事であり、宴遊の庭であった江戸の大名庭園の特徴をよく表している。

史料から、当時の回遊ルートを知ることができる。天保13(1842)年9月に僧侶の知恩院宮尊超法親王が来訪した時に立ち寄った場所及び順路は以下のものであった。

1. 大手門 → 2. 御成門 → 3. お伝い橋 → 4. 中島の御茶屋 → 5. 中島橋 →
6. 八景山 → 7. 新銭座鴨場 → 8. 観音堂 → 9. 潮見山 → 10. 富士見山 →
11. 塩浜藁屋 → 12. 海手茶屋(汐見の御茶屋) → 13. 中島の御茶屋 →
14. お伝い橋 → 15. 富士見山 → 16. 塩浜藁屋 → 17. 御亭山の腰掛 →
18. 庚申堂鴨場 → 19. 織殿 → 20. 松の御茶屋 → 21. 藁葺の茶屋(鷹の御茶屋) →
22. 燕の御茶屋

大手門から入り、中島の御茶屋に立ち寄ったあと、茶屋や築山など潮入の池周辺の見どころをくまなく回遊していたことが分かる。

この時代は、将軍の来訪回数が際立って高く、表2-3に示すとおり、歴代将軍の御成りでは、11代将軍家斉が248回で最も多く、次いで12代将軍家慶が99回であった⁴⁵⁾。

13代将軍家定以降は、将軍の御成りは少なく、観賞や娯楽、社交の場としての利用はほとんどなかった。



図2-10 「浜の御苑之記」(天保5(1834)年) 国立国会図書館所蔵

表 2-3 歴代将軍の来訪回数

| 将軍 (在職年数) | 5代 綱吉 (4.1) | 6代 家宣 (3.5) | 7代 家継 (3.0) | 8代 吉宗 (29.1) | 9代 家重 (14.6) | 10代 家治 (26.0) | 11代 家斉 (50.0) | 12代 家慶 (16.2) | 13代 家定 (4.9) | 14代 家茂 (7.8) | 15代 慶喜 (0.5) | 合計 |
|-----------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------|--------------------|---------------------|---------------------|---------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------|
| 将軍(回) | 0 | 7 | 0 | 4 | 0 | 19 | 248 | 99 | 6 | 5 | 0 | 388 |
| 将軍以外(回) | 11 | 13 | 2 | 14 | 36 | 10 | 49 | 16 | 0 | 1 | 1 | 153 |
| 合計(回) (割合・%) | 11 (2.0) | 20 (3.7) | 2 (0.4) | 18 (3.3) | 36 (6.7) | 29 (5.4) | 297 (54.9) | 115 (21.2) | 6 (1.1) | 6 (1.1) | 1 (0.2) | 541 (100) |

服部勉,進士五十八 「江戸期浜離宮における回遊利用の図上復元についての研究」平成3年,造園雑誌第54巻第5号P26 を一部修正
 上記の表は、松平綱豊が5代将軍綱吉の嗣子となり、本園が徳川将軍家の所有となった宝永元（1704）年から
 浜御殿が廃止された慶応3（1867）年までの163年間を集計したものである。

5 浜離宮時代 I (明治元年—延遼館解体まで)

「浜離宮時代 I」は、明治元（1868）年から、本園が「浜園」、「浜殿」、「浜離宮」と名称を替え、「延遼館」が解体される明治 23（1890）年までの 23 年間とした。

明治元（1868）年、海軍所は一時朝廷の所有となり「浜園」と呼ばれたが、その後、軍務官、外国官に移管され、「浜殿」と称されるようになり、同年中に東京府に引き継がれた。その際、観音堂その他の建物が払い下げられ、浜御殿の役人の溜所や長屋等の多くの建物が取り壊された³⁰⁾。

明治 2（1869）年 5 月、英国皇子エジンバラ公の来朝にあわせ、未完成だった石室を明治政府が改修して、近代日本最初の迎賓施設「延遼館」が完成した²³⁾。これをきっかけとし、庭園や馬車小屋等の整備も徐々に進められた。また、大手門を含む延遼館周辺の園地が延遼館敷地として外国官の所管となったことに伴い、同年 9 月、従来的小手門は「延遼館表門」と称し、潮入の池を中心とする御庭地区への出入りは従来の中の御門である「浜離宮表門」からに限られた³⁰⁾。

明治 3（1870）年 10 月、延遼館敷地以外の園地はすべて宮内省の所管となり、本園は「浜離宮」と改称された。その後、明治 17（1884）年に、延遼館は宮内省に引き継がれ、敷地全体が離宮となったが、図 2-11 の「五千分一東京図測量原図」から分かるように、大泉水や横堀、2つの鴨場の地割は、江戸時代と大きく変わらず保たれた。

図 2-12 より、延遼館正面には、整形された西洋風の刈込が建物に合わせて左右対称に列植されていた様子が見られる。また、図 2-13 より、延遼館南面には、緩やかな流れを配した広々とした芝庭が見られることから、延遼館の芝庭は、建物と一体的に利用する社交の場であったことが推測される。しかし、延遼館は、明治 22（1889）年 12 月には取り壊しが決定し、明治 23（1890）年に解体された³¹⁾。

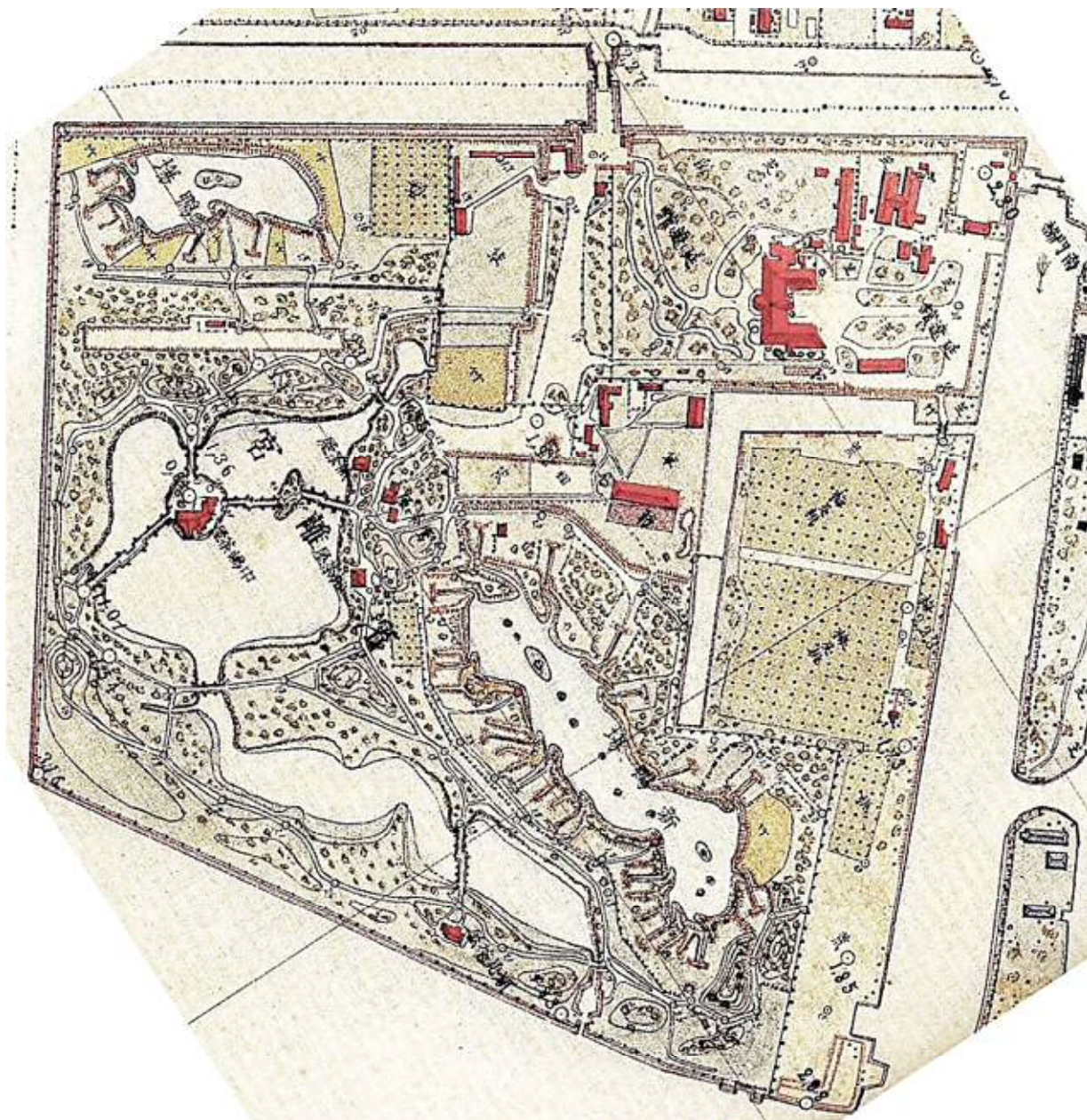


図2-11 「五十分一東京図測量原図」(明治17(1884)年)
参謀本部陸軍部測量局((財)日本地図センター)



図2-12 THE RESIDECE OF GRAND DUKE ALEXIS O-HAMA
GO-TEN (明治5(1872)年) 横浜開港資料館所蔵



図2-13 濱 延遠館 裏面
(明治5(1872)年頃) 東京国立博物館所蔵

庭園の利用

延遼館の完成以降、明治2（1869）年7月の英国皇子エジンバラ公の来朝をはじめ、多くの外国貴賓を迎え、時には宿泊を伴った。延遼館では、外国貴賓の宿泊以外にも、天長節や晩餐会が行われた。延遼館南面の芝庭では、雅楽の演奏や天覧相撲など、様々な催しが行われた。なかでも明治12（1879）年の第18代アメリカ大統領グラント将軍の来朝時には、延遼館に滞在し、中島の御茶屋で明治天皇と会談が行われたことは特筆すべき歴史的事象である^{41) 42)}。明治16（1883）年から本園で行われるようになった観桜会では、来賓が延遼館で天皇皇后に接見した後、潮入の池では雅楽や洋楽の演奏を聞きながら桜を眺めて遊覧し、茶屋では立食式の食事がもてなされた。園全体が迎賓の舞台として利用されるようになった。

また、幕末以降途絶えていた鴨猟が明治2年の英国皇子来朝を機に復活し⁴⁴⁾、国内外の賓客を招いては鴨猟を行い、鴨場が社交や外交の場として利用された。

6 浜離宮時代Ⅱ（延遼館解体後－東京都に下賜まで）

「浜離宮時代Ⅱ」は、延遼館が明治23（1890）年に解体されてから、本園が東京都に下賜された昭和20（1945）年までの56年間とした。

延遼館の解体に伴い、明治2（1869）年の延遼館完成後から続いていた門の呼称は、明治25（1892）年3月、大手門が延遼館表門から浜離宮表門に、中の御門が浜離宮表門から通用門に改称され³⁰⁾、大手門が再び本園の表門に戻った（図2-14, 2-15）。

明治30（1897）年、新銭座鴨場が東側に拡張され、新銭座鴨場の北側には鷹匠の住まいや鷹の飼育小屋、ハト小屋などが建てられた³⁵⁾。

図2-16の「濱離宮総図」から、解体後の延遼館跡は更地となったが、園路線形が僅かに変わったものの、流れや芝庭はそのまま残されていたことが分かる。

明治時代以降、都市として急速に発展した東京では、千住、新場、日本橋、芝金杉の4カ所に市場が整備されていたが、衛生状況の悪化や手狭であることなどに対する不安や不満から、公設の中央卸売市場の設置を望む声が出ていた。大正10（1921）年5月27日に、芝離宮と浜離宮を魚市場用地として宮内省が払い下げることが内定した、という記事が新聞に掲載されたが、同年6月8日に、庭園協会代表本多静六、宮内省次官関谷貞三郎、小原内匠頭が会見を行い、宮内省には払下げの意思がないことを表明した。この時、本多静六をはじめとする有識者達が、海外と日本での公園面積を比較し、緑地の重要性について宮内大臣に意見書を提出したこと³⁸⁾も追い風となり、本園の敷地は守られた。

大正12（1923）年9月1日に発生した関東大震災では、周囲からの延焼によって大手門渡櫓や大手門橋、汐見の御茶屋等が焼失し、御馬見場及び御成御門左右の塀は損傷のため取り壊された³²⁾。更に、太平洋戦争の空襲により、中島の御茶屋、燕の御茶屋、松の御茶屋、鷹の御茶屋、初倉など、園内の主だった建造物は焼失し^{注2)}、僅かに稲生神社や内匠寮員詰所（現在の芳梅亭）などが焼け残った。

注3）御茶屋等の焼失時期については2説ある。「中央区誌下巻」⁴⁷⁾では昭和19（1944）年11月29日としており、「建物台帳異動録」⁴⁶⁾では昭和20（1945）年3月10日としている。



図2-14 大手門渡櫓（正面）（大正時代）
宮内公文書館所蔵



図2-15 大手門橋（大正時代）
宮内公文書館所蔵

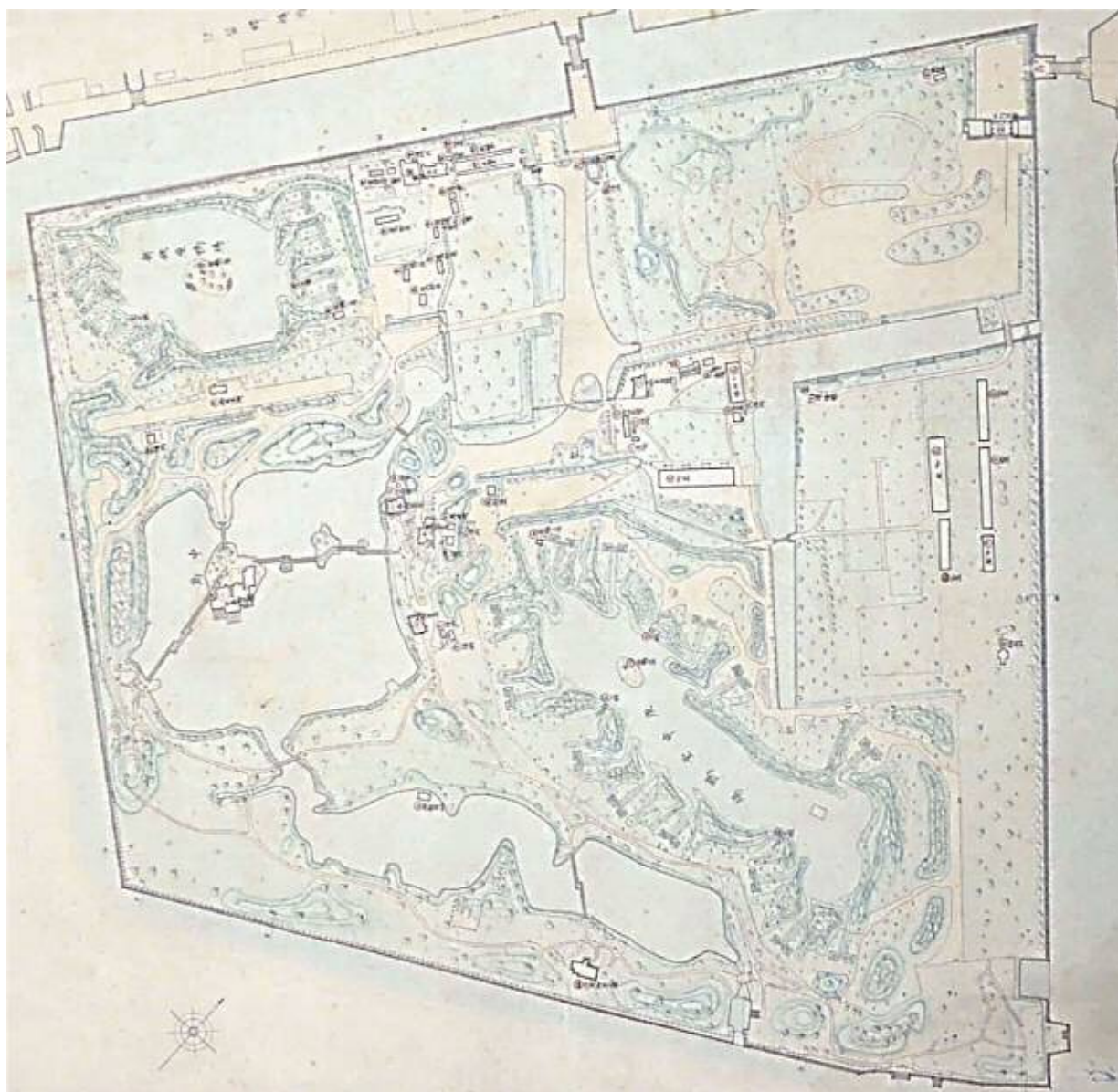


図2-16 「瀆離宮総図」(大正9(1920)年) 宮内公文書館所蔵

庭園の利用

明治23(1890)年に延遠館が解体された後も、離宮として皇室の公式行事に利用された。明治24(1891)年に行われた観桜会では、天皇皇后は延遠館跡を通過して大泉水に抜け、御茶屋の間を通り、海手お伝い橋から汐見の御茶屋に抜け、海手を歩き、大泉水と横堀との間の芝生に設けられた仮設の立食所に入った。その間には、近衛楽隊による洋楽や式部楽隊による雅楽の演奏が行われた。その後来賓も池の周囲を回遊し、立食所に入って軽食を取った。観桜会は新宿御苑に移る大正5(1916)年まで続けられた。

7 浜離宮恩賜庭園の時代

「浜離宮恩賜庭園の時代」は、昭和 20（1945）年に本園が東京都に下賜されてから現在に至るまでとした。

下賜後、戦後の物資不足で資材調達が困難な時期ではあったが、東京都は掲示、人止柵、便所等を仮設で設置し、海岸沿いの生い茂った草を刈り取り、昭和 21（1946）年 4 月 1 日に「浜離宮恩賜庭園」として一般に開放した。その後も戦災による荒廃からの再整備が続けられ、昭和 23（1948）年 12 月 18 日、本園は名勝及び史蹟に指定された。

昭和 26（1951）年 12 月、園内に幅員 20m の都市計画道路（放射十八号）が貫通する道路計画が告示された。これに対して、文化財保護委員会は反対を貫き、3 度の計画案の変更を経て貫通の計画は中止となり、庭園損失の危機を回避した。昭和 27（1952）年 3 月 29 日には、周囲の水域部分を文化財範囲に追加指定し、同年 11 月 22 日に特別名勝及び特別史跡に指定された。

しかしながら、昭和 30（1955）年 4 月、首都高速道路建設のために本園北西側の汐留川が一部埋め立てられ、陸地と本園の間の濠の間隔が狭くなった。その後、都市開発が進展して本園周辺には高層建築物が林立し、富士見山から富士山を望む眺望が失われた。また、東京湾内の埋立ての進行とともに、水害に対する防災機能の強化が図られ、昭和 40（1965）年代に防潮堤と水門が整備された。その結果、本園の特徴であった東京湾の大海原と房総半島の眺望が失われた。

施設整備については、昭和 23（1948）年にテニスコート 5 面、昭和 24（1949）年に集会場（芳梅亭）を改修、昭和 29（1954）年にお伝い橋、昭和 40（1965）年に海手お伝い橋を復旧した。

また、本園の新たな活用方法として、都立会館案、鴨場案、国際ホテル案、遊園地案が提出されたが、どれも実現はしなかった。昭和 28（1953）年に水上バスが発着するようになり、浅草方面と本園をつなぐ水上交通として現在も続いている³⁸⁾。

昭和 61・62（1987・1988）年度浜御殿遺跡調査会により、テニスコートと苗圃があった内堀広場で大規模な遺跡調査が行われた。調査後は遺構保護のため盛土を行い、現在も花畑とボタン園として利用されている³⁹⁾。また、内堀を挟んだ南側の場所は、下賜された時には倉庫が置かれた広場であったが、後に休憩所を設置した花木園となった。更に、中の御門南側は、運動場ができ、後に野外卓広場となった。

時代の経過とともに文化財保護に対する人々の理解が深まっていき、東京都は、昭和 57・58（1982・1983）年に中島の御茶屋を復元し、平成 5・6（1993・1994）年に庚申堂鴨場の浚渫、護岸修復工事を行うなど、順次、園内の整備を行っていった。

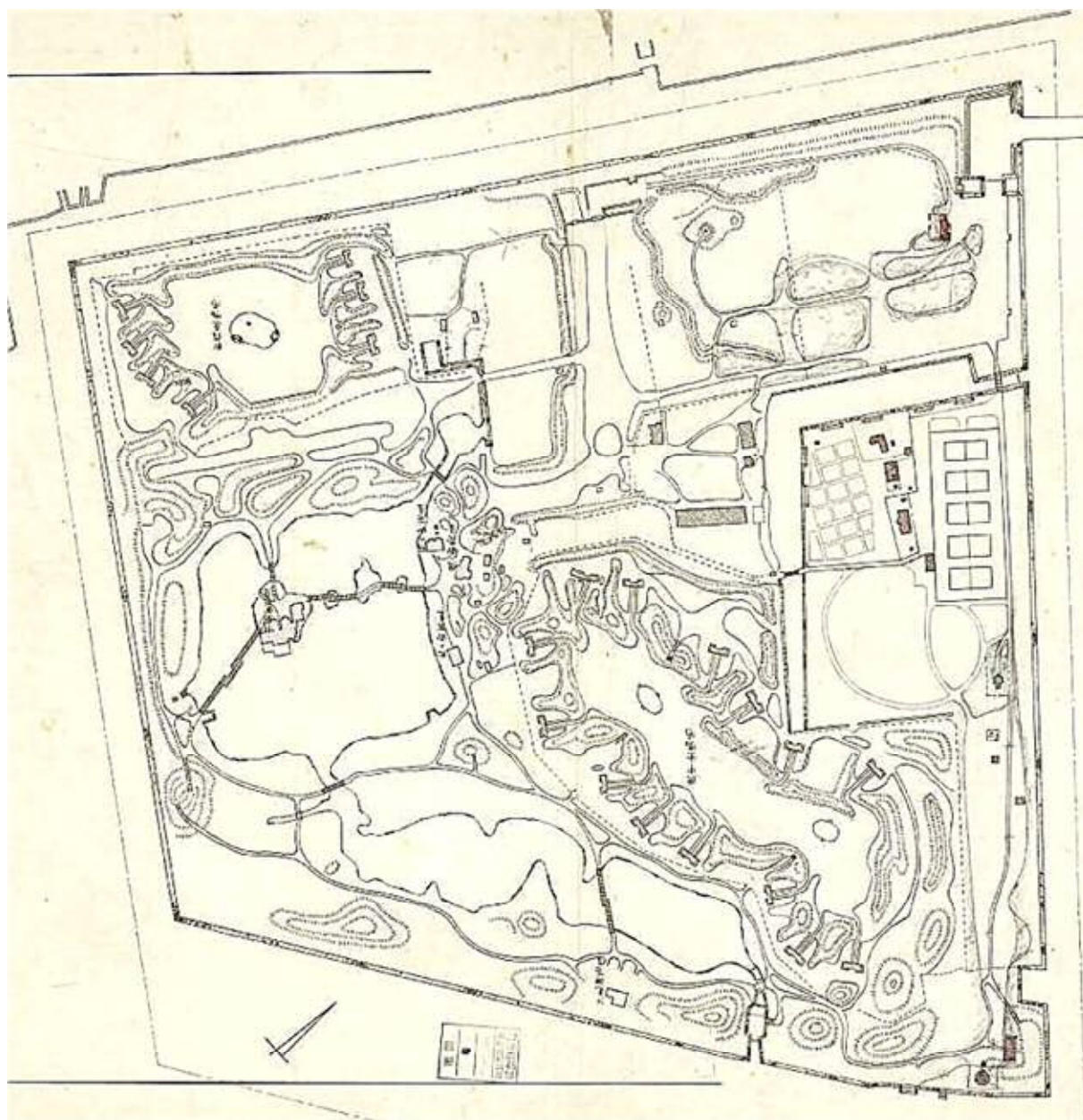


図2-17 浜離宮恩賜庭園平面図（昭和26（1951）年） 東京都公園協会所蔵



図2-18 無料公開時の園内
（昭和47（1972）年5月）



図2-19 都民の日記念友好交歓会
（平成6（1994）年10月1日）

庭園の利用

本園は当初、昭和 21（1946）年 4 月 1 日に無料開放したが、同年 6 月からは庭園の十分な保護を目的として有料に変更した。昭和 22（1947）年、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の命令により、本園が米軍の練兵場として使用されることになり、演習時には一般の入場が禁止された。演習による施設の乱暴な使用や風紀の乱れが目立つようになった。

その後、東京都は昭和 23（1948）年からテニスコートや休養施設、便益施設などの整備を開始し、都心の広大な緑の空間として都民の利用に供されてきた（図 2-17）。

昭和 47（1972）年 4 月 1 日より、都民に広く緑を開放し、緑の貴重さを体験的に認識してもらうことを期待して無料公開を導入した（図 2-18）。その結果、庭園が無秩序に使われ、文化財として庭園管理上検討すべき事柄が目立つようになってきた³⁸⁾。そのため東京都は、諮問機関である東京都公園審議会に対し「庭園の管理のあり方について」諮問し、昭和 53（1978）年の答申を受けて、昭和 54（1979）年 4 月 1 日に再び有料とした³⁸⁾。

下賜以前は、将軍家や皇室などごく限られた特権階級しか許されなかった庭園利用が、一般都民に広がり、公共の空間となったといえる。テニスコートや運動場が整備され、大泉水がボート場になるなど、都民のレクリエーション需要を満たすため、園内では様々な試行的な利用を導入した。また、都民の日を記念した友好交歓会などの行事も催された（図 2-19）。

現在の主な利用は、庭園観賞や散策はもとより、ウメやサクラといった季節の草花、自然とのふれあいのほか、集会施設の利用、放鷹術の実演など時節の催事の鑑賞などであり、本園の魅力を来園者がいつでも感じることができる。平成 24（2012）年に行われた第 29 回全国都市緑化フェア TOKYO では、江戸園芸や庭園技術の紹介に加え、江戸情緒漂う飲食・物販エリアにより、江戸の「食」や雰囲気を紹介する場として活用された。

歴史的変遷に記載ある引用文献

- 1) 小宮山綏介. 二苑紀略. 東京都公文書館所蔵.
- 2) 甲府日記. 東京都公文書館所蔵.
- 3) 常憲院殿御實記. 国立国会図書館所蔵.
- 4) 文昭院殿御實記. 国立国会図書館所蔵.
- 5) 有徳院殿御実記. 国立国会図書館所蔵.
- 6) 有徳院殿御実記附録. 国立国会図書館所蔵.
- 7) 浚明院殿御実記. 国立国会図書館所蔵.
- 8) 文恭院殿御実記. 国立国会図書館所蔵.
- 9) 慎徳院殿御実記. 国立国会図書館所蔵.
- 10) 昭徳院殿御実記. 国立国会図書館所蔵.
- 11) 濱苑建置考. 東京都公文書館所蔵.
- 12) 間部日記. 国立国会図書館所蔵.
- 13) 柳營日記. 国立国会図書館所蔵 (デジタルコレクション).
- 14) 寶永年録 (宝永年録). 国立国会図書館所蔵 (デジタルコレクション).
- 15) 小沢圭次郎. 園苑源流考. 1890-1905, 明治園芸史. 国立国会図書館所蔵.
- 16) 小川泰. 濱殿旧記 上. 東京都公文書館所蔵.
- 17) 小川泰. 濱殿旧記 下. 東京都公文書館所蔵.
- 18) 横山信, 高橋仁. 日本建築年表. 1931. 国立国会図書館所蔵.
- 19) 文政年録. 国立国会図書館所蔵 (デジタルコレクション).
- 20) 徳川氏. 濱庭道の記. 東京都公文書館所蔵.
- 21) 藤川貞 (整斎). 天保雑記. 東京都公文書館所蔵.
- 22) 玉利喜造 ほか合著. 明治園藝史. 東京都立中央図書館所蔵.
- 23) 大政官日記. 国立国会図書館所蔵.
- 24) 矢嶋松軒編. 濱の松風. 東京都公文書館所蔵.
- 25) 間部詮勝. 濱の眞砂. 1781 (天明元年) の記あり. 東京都公文書館所蔵.
- 26) 濱御園御供の記 官女梅溪. 東京都公文書館所蔵.
- 27) 成島司直. 浜の浦ゆふ. 東京都公文書館所蔵.
- 28) 小山田与清. 浜の松葉. 1842 (天保 13 年). 東京都公文書館所蔵.
- 29) 徳川幕府家譜坤. 早稲田大学図書館デジタルデータ.
- 30) 宮内省管理部工務課. 沿革一宮城, 葉山御用邸, 沼津御用邸, 廃止離宮御用邸, 醒花亭, 飛香舎, 浜離宮, 田母沢御用邸・同附属邸, 日光御用邸, 塩原御用邸, 伊香保御用邸, 皇居内御洗濯所, 大宮御所, 常盤松御用邸, 青山御所, 高輪南町御用邸, 桂宮本邸, 桂離宮, 立石御休所一. 1960. 宮内公文書館所蔵.
- 31) 宮内省内匠寮. 浜離宮沿革誌. 1921-1922. 宮内公文書館所蔵.
- 32) 中島卯三郎. 濱離宮と其庭園に就て. 造園研究第二輯. 1931.
- 33) 中島卯三郎. 濱離宮と其庭園に就て. 造園研究第三輯. 1931
- 34) 中島卯三郎. 濱離宮と其庭園に就て. 造園研究第四輯. 1932.
- 35) 宮内省内匠寮. 明治 30 年工事録 7 第 32 号. 1897. 宮内公文書館所蔵.
- 36) 浜御殿遺跡調査会. 浜殿遺跡調査報告書. 1988.
- 37) 中島宏. 浜御殿の植栽構成に関する史的考察. 日本庭園学会誌. 2003
- 38) 小杉雄三. 浜離宮庭園. 東京都公園緑地部監修・東京公園文庫 12, 東京都公園協会, 1981.
- 39) 東京都公園協会. 浜離宮十年のあゆみ (浜離宮十年誌). 1955.
- 40) 外務省沿革類従. 外務省外交史料館所蔵.
- 41) 宮内省 臨時帝室編修局. 明治天皇紀. 吉川弘文館.
- 42) ジュン・ラッセル・ヤング. グラント将軍日本訪問記. 雄松堂出版, 1983.
- 43) 宮内省式部職. 自明治十六年至明治十七年 観櫻会録. 1883-1884. 宮内公文書館所蔵.
- 44) 服部勉・進士五十八. 浜離宮庭園における鴨場についての研究. 1994, 造園雑誌 57 (5).
- 45) 服部勉・進士五十八. 江戸期浜離宮庭園における回遊利用の図上復原についての研究. 1991, 造園雑誌 54.
- 46) 宮内省内匠寮. 建物台帳異動録自昭和 20 年至昭和 21 年. 1945~1946. 宮内公文書館所蔵.
- 47) 中央区. 中央区誌下巻. 1958.

上記の引用文献は全てが本文中に記載されているものではない。

2-2 周辺環境の変遷

江戸時代の本園は、東京湾を越えてお台場や房総の山々を望む場所であった。明治時代以降に周辺の海は埋め立てられ、近年、高層建築物が建ち並んだ。明治時代から現在までの土地利用及び園内からの景観の変遷を以下に整理し、周辺環境の変遷としてまとめた。

(1) 明治時代～戦前

図 2-20 の「五千分一東京図測量原図」では、明治時代は本園の周辺には埋立地はなく、南東方向の海への眺望が開けていたことが分かる（図 2-21）。

その後、図 2-22 のように、昭和 19（1944）年までに、周辺の開発が進み、月島（現勝どき）や竹芝が埋め立てられた。



図 2-20 「五千分一東京図測量原図」
（明治 17（1884）年）
参謀本部陸軍部測量局（（財）日本地図センター）



図 2-21 「帝都俯瞰写真」（明治 37（1904）年 6 月）
宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵に加筆

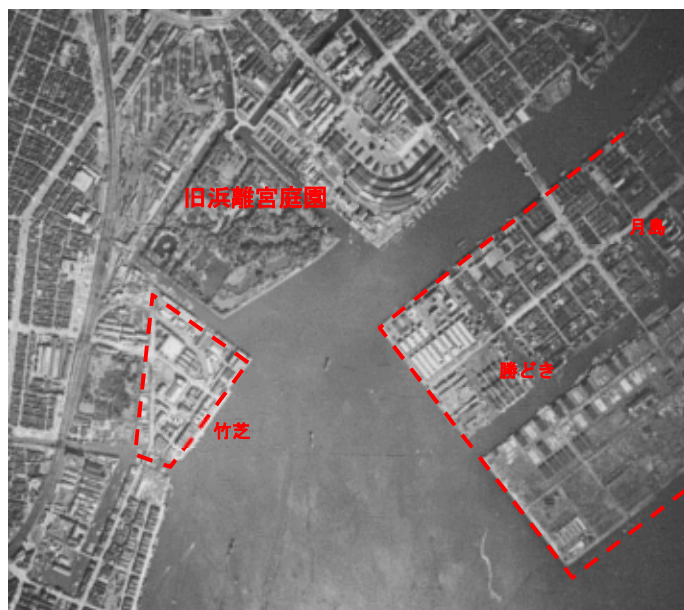


図 2-22 昭和 19（1944）年 11 月 陸軍撮影 国土地理院所蔵に加筆

(2) 戦後～高度経済成長期

昭和 30 (1955) 年頃は、既に東側の勝どきは埋め立てられていたものの、図 2-23 から、海への眺望はまだあったことが分かる。

しかし、その後の開発により、図 2-24 のように月島側の埋立地 (現豊海) が延伸し、埋立地が本園を取り囲む形となった。また、昭和 30 (1955) 年に北西側の汐留川が埋め立てられ、約 45m あった濠の幅は約 7 m にまで狭くなり、昭和 37 (1962) 年に本園の西側を通る形で首都高速道路が建設された。

更に、昭和 40 (1965) 年代には、図 2-25 のように本園東側に、防潮堤が建設された。



図 2-2 3 御亭山付近からの海への眺望 (昭和 30 (1955) 年撮影) 東京都公園協会所蔵

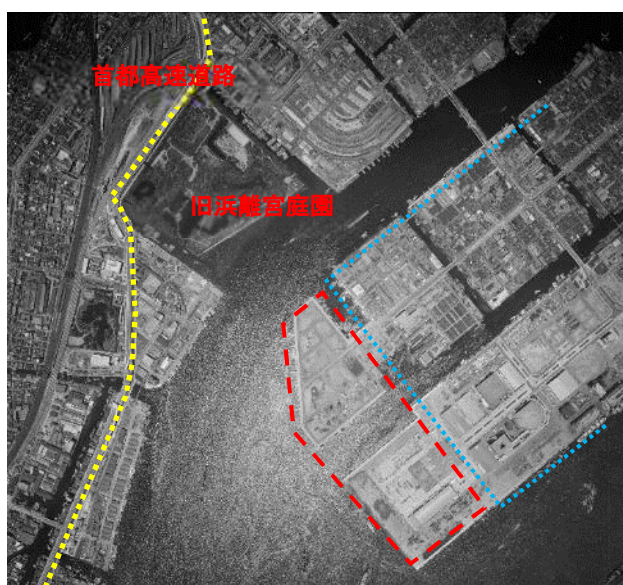


図 2-2 4 昭和 38 (1963) 年 3 月撮影
国土地理院所蔵に加筆

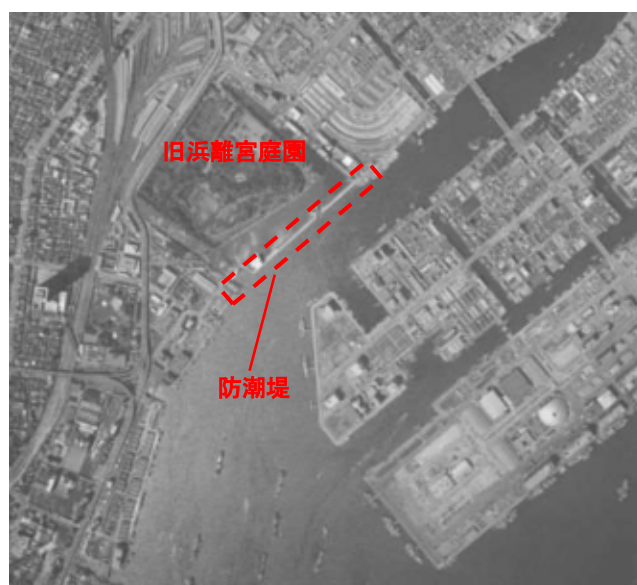


図 2-2 5 昭和 46 (1971) 年 4 月撮影
国土地理院所蔵に加筆

(3) 高度経済成長期～現在

本園から南側及び東側の埋立地には、高層ビルが建ち並んだ（図 2-27・28）。

昭和 61（1986）年に汐留貨物駅が廃止され、平成 7（1995）年から汐留の都市再開発事業が進み、本園の北から西にかけての眺望が大きく変わった（図 2-29）。

海への眺望があった本園の南東側（図 2-30）遠方にも建築物が建ち並んだ。

近年ではレインボーブリッジやお台場のフジテレビ社屋など、新たな東京のランドマークを望むことができる。東京の伝統と現代の姿を同時に味わうことができるスポットとして、一部の来園者から人気を集めている。

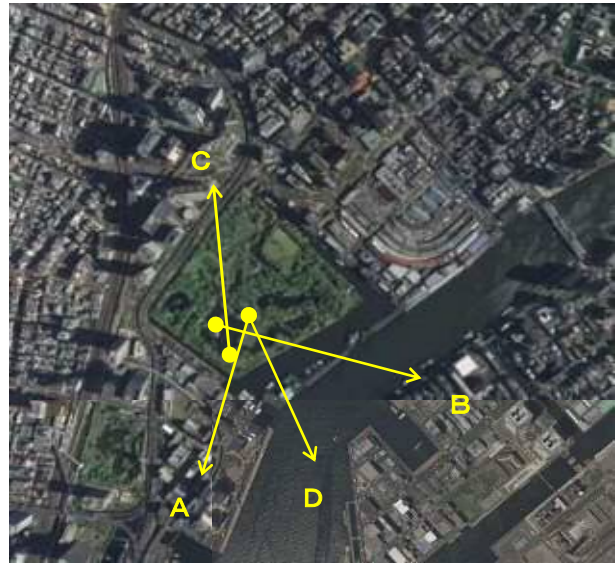


図 2-26 園内から四方への眺望
平成 21（2009）年撮影 国土地理院所蔵に加筆

※図 2-27～30 の図内の数値はビルの地上高を示す。



図 2-27 御亭山から竹芝方面への眺望
（平成 28（2016）年撮影）



図 2-28 中島の御茶屋から勝どきへの眺望
（平成 28（2016）年撮影）

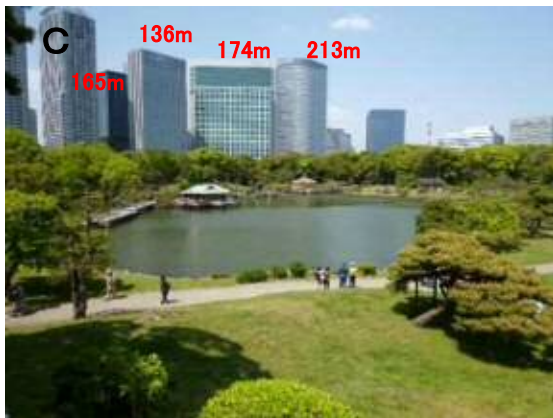


図 2-29 富士見山から潮入の池への眺望
（平成 28（2016）年撮影）



図 2-30 御亭山から海への眺望
（平成 28（2016）年撮影）（図 2-23 と同じ場所で撮影）

3. 本園の現況

3-1 現況及び施設配置

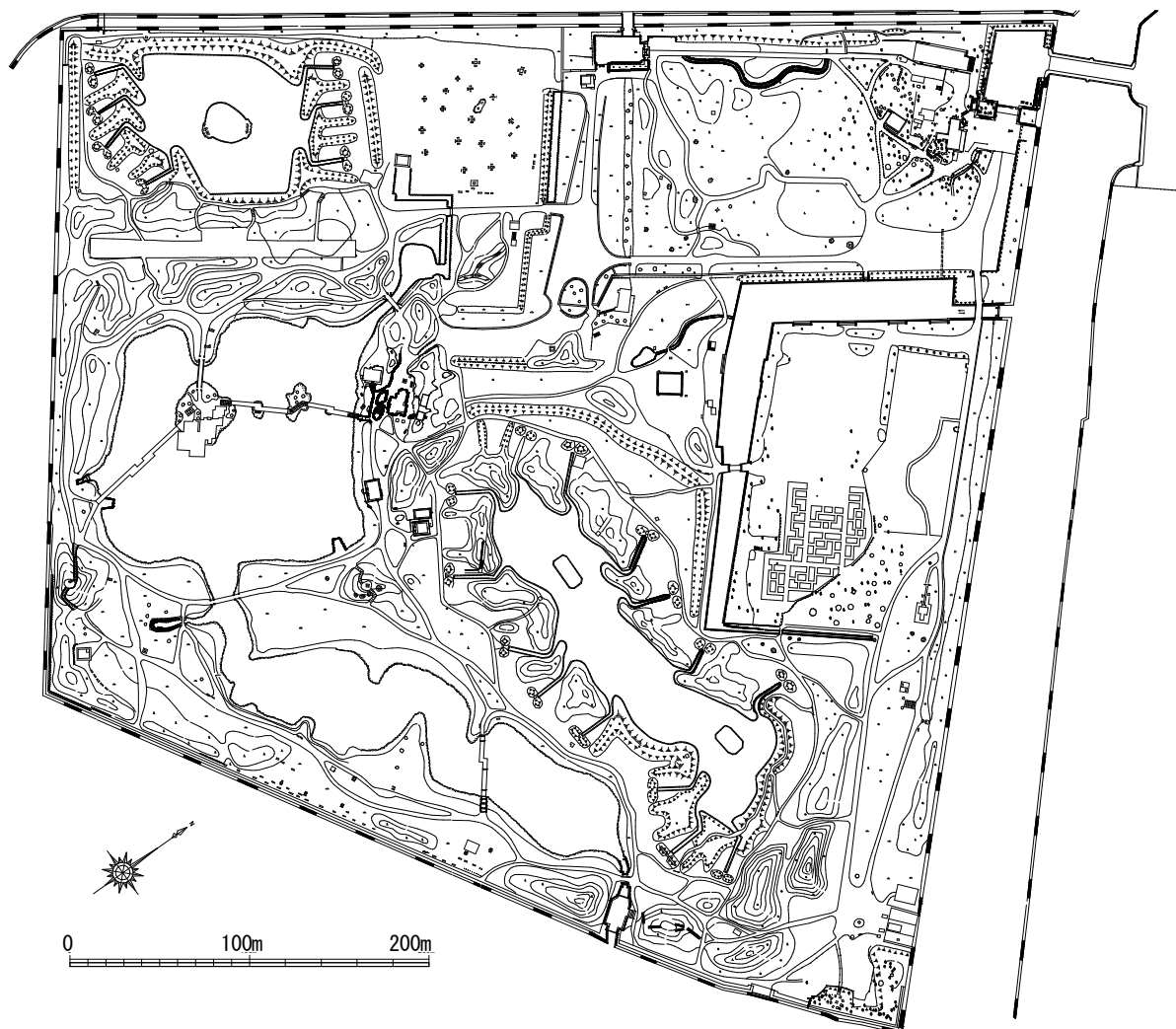


図2-31 浜離宮恩賜庭園平面図（平成28（2016）年）

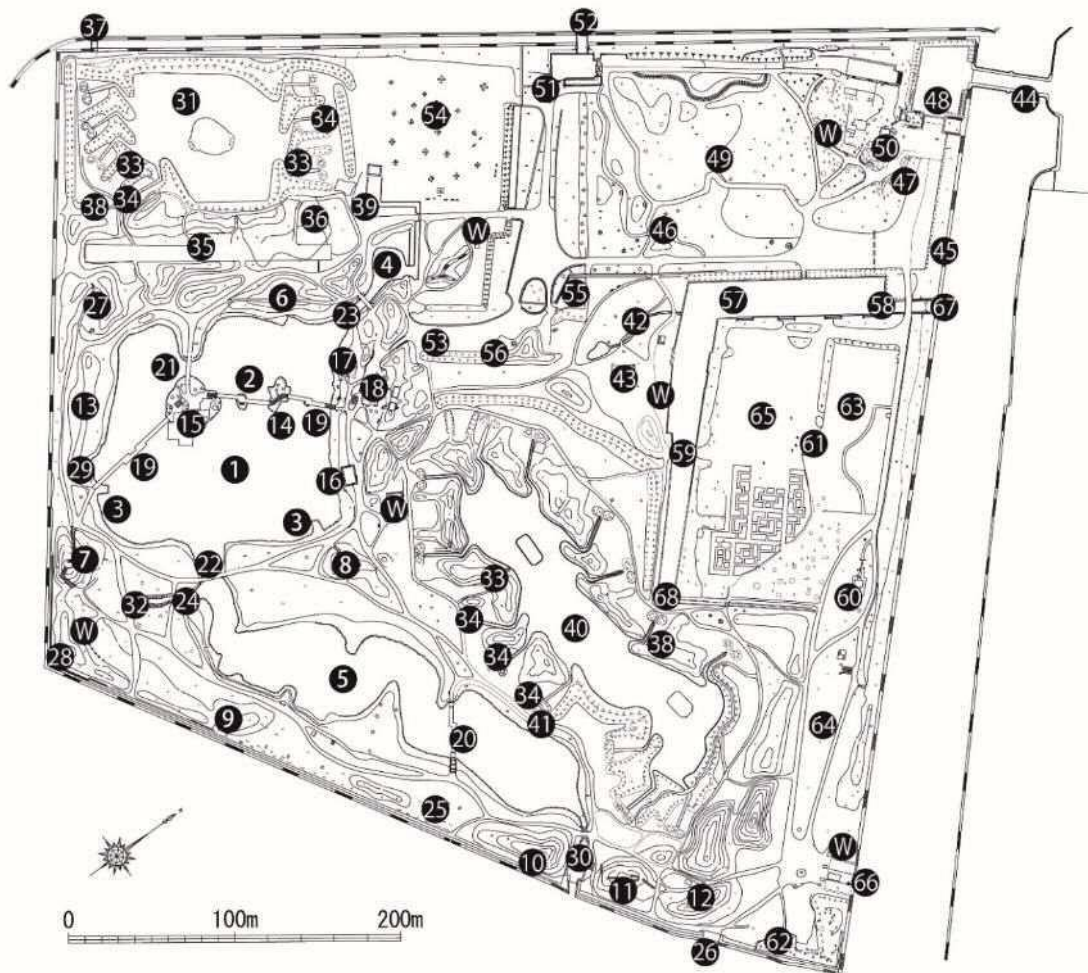


図2-32 主な施設の位置図

- | | | | |
|------------|------------|--------------|------------|
| 1 大泉水 | 18 鷹の御茶屋跡 | 35 馬場跡 | 52 中の御門橋 |
| 2 小の字島 | 19 お伝い橋 | 36 鴨塚 | 53 御庭口御門跡 |
| 3 船付場 | 20 海手お伝い橋 | 37 新銭座橋 | 54 野外卓広場 |
| 4 舟溜り | 21 中島橋 | 38 角落し堰 | 55 芳梅亭 |
| 5 横堀 | 22 中の橋 | 39 新銭座水門 | 56 可美真手尊像 |
| 6 八景山 | 23 三間橋 | 40 庚申堂鴨場 | 57 内堀 |
| 7 富士見山 | 24 海手小橋 | 41 庚申堂水門 | 58 御蔵道橋 |
| 8 御亭山 | 25 汐見の御茶屋跡 | 42 花木園 | 59 稻荷前橋 |
| 9 つつじヶ岡 | 26 将軍お上がり場 | 43 休憩所 | 60 旧稻生神社 |
| 10 樋の口山 | 27 観音堂跡 | 44 大手門橋(南門橋) | 61 初倉跡 |
| 11 新樋の口山 | 28 砲台跡 | 45 三百年の松 | 62 灯台跡 |
| 12 蛇山 | 29 汐留川水門 | 46 延邊館跡の藤棚 | 63 花畑 |
| 13 三丈ヶ岡 | 30 横堀水門 | 47 井戸 | 64 梅林 |
| 14 お伝い橋の藤棚 | 31 新銭座鴨場 | 48 大手門口 | 65 内堀広場 |
| 15 中島の御茶屋 | 32 小水門 | 49 延邊館跡 | 66 水上バス発着場 |
| 16 松の御茶屋 | 33 大観 | 50 管理所 | 67 内堀門 |
| 17 燕の御茶屋 | 34 小観 | 51 中の御門口 | 68 内堀水門 |
| | | | W 便所 |

3-2 主な視点場からの景観

本園における主な視点場（図 2-33）からの園内の景観を図 3-34 に示す。

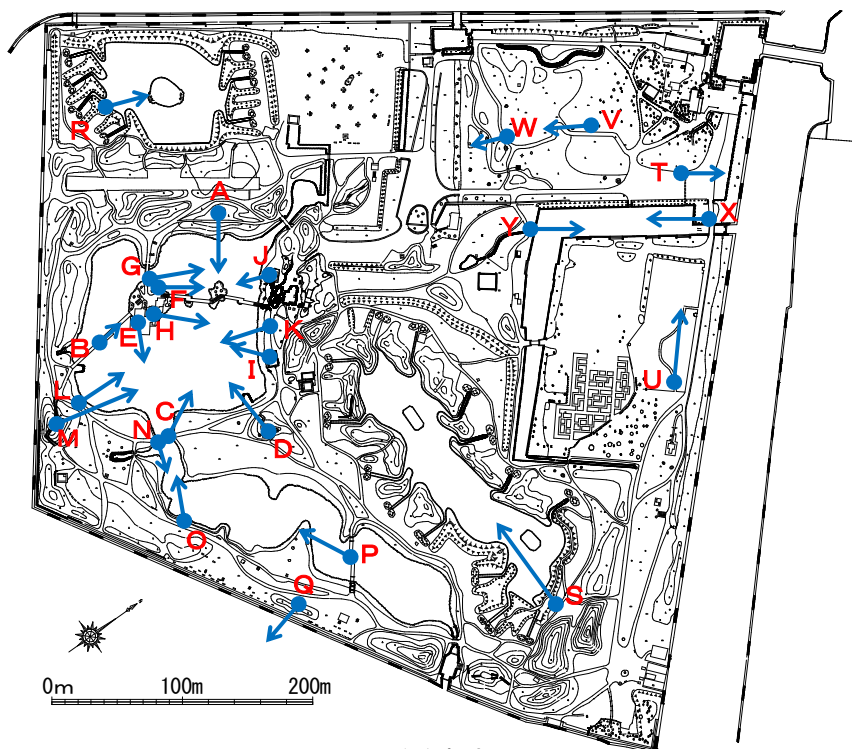


図 2-33 主な視点場



A: 八景山から大泉水の景観



B: お伝い橋（南側）の景観



C: 中の橋から大泉水の景観



D: 御亭山から大泉水の景観

図 2-34 園内の景観 (1/4)



E：中島の御茶屋から中の橋の景観



F：お伝い橋から小の字島の景観



G：中島橋脇から燕の御茶屋の景観



H：中島の御茶屋から松の御茶屋の景観



I：松の御茶屋からの景観



J：燕の御茶屋からの景観



K：松の御茶屋脇から潮入の池の景観



L: 富士見山麓から大泉水の景観



M: 富士見山から潮入の池を俯瞰した景観



N: 中の橋から横堀の景観



O: 横堀から中の橋、中島の御茶屋の景観



P: 海手お伝い橋から横堀の景観



Q: 汐見の御茶屋跡からの景観

図 2-3 4 園内の景観 (3/4)



R: 新銭座鴨場の景観



S: 庚申堂鴨場の景観



T: 三百年の松の景観



U: 花畑の景観



V: 延遼館跡の景観



W: 延遼館の庭（北庭）の景観



X: 御蔵道橋から内堀の景観



Y: 花木園から内堀の景観

図 2-3 4 園内の景観 (4/4)

4. 本園の本質的価値

4-1 本質的価値の明示

本園の本質的価値とは、芸術上・観賞上の価値、歴史上・学術上の価値等を示すものである。歴史的変遷を踏まえ、以下に本園の本質的価値を整理する。

(1) 芝沖を埋め立て、海と濠に囲まれた広大な敷地と地割が保存された徳川将軍家唯一の別邸

江戸城の南に2キロの位置にあった芝沖の葦原を埋め立ててつくった本園は、かつては、浜御殿、浜御庭等とよばれ、四周を石垣と濠で囲んでいる。昭和30年に、本園西方の汐留川の濠が一部埋め立てられ、首都高速道路が建設された。陸地と本園との距離が部分的に狭くなったが、現在でも四周が海と濠に囲まれた約25ヘクタールの広大な敷地と内堀等の地割が、創設当初のものを伝えている。

本園には、徳川将軍家唯一の別邸にふさわしい大手門と柵形の構えが造られ、かつての江戸湾から江戸城への入口として城の外郭の一角を担い、幕末には軍事施設が置かれた。関東大震災や、太平洋戦争の空襲によって大手門渡櫓や、御茶屋などの主要な建物が焼失したが、現在でも最大級の潮入の池と2つの鴨場、御茶屋等の遺構がよく保存されている。

(2) 潮入の池を中心として趣の異なる御茶屋や築山を巡り、水景を觀賞する回遊式庭園

本園は、11代将軍家斉の時代に園景が最も充実し、潮入の池を中心とした回遊式庭園であり、趣の異なる5つの御茶屋と3つの築山、松や山吹、桜、楓等が配されていた。かつては、お伝い橋を渡って御茶屋を巡り、築山に登り、近景には大泉水や築山、中景に品川湾や白帆船、遠景に富士山をみる雄大な眺めが望めた。

現在は、昭和40年代の防潮堤や平成の汐留の都市再開発事業等により、東方の東京湾と房総半島、西方の富士山などの遠景に望めた園外景観はいずれも消失した。御亭山や富士見山などの築山からは、現在でも庭園全体を見渡せるパノラマ景観を觀賞することができる。

近年、潮入の池の中島にある御茶屋をはじめとして、趣の異なる複数の御茶屋を復元し、築山からの近景には御茶屋と潮入の池の眺望が蘇った。海水を池に引き入れる潮入の池の手法は、江戸市中でよく用いられたが、都内で現存するのは本園のみである。

(3) 江戸時代から現代に至るまで、徳川将軍家や天皇が客人を歓待した宴遊の庭園

徳川将軍家は、潮入の池や鴨場で、公家や僧侶をもてなし、宴遊の場とした。

明治2年に、宮内省（一部、延遼館周辺は外国官）に所管が移り、近代日本最初の迎賓施設である「延遼館」が建設された。延遼館と潮入の池など本園全体で、多くの外国要人が歓待され、明治天皇との会談、天覧相撲など、我が国を代表する宴遊の舞台となり、初めての天長節や観桜会が開催された。

江戸時代に歴代の将軍が嗜んだ鷹狩と鴨猟という武家文化を、現代は正月の放鷹術等で来園者に伝えている。本園は、徳川将軍家や天皇が、客人を歓待した場であり、昭和20年に東京都に下賜された後も、都知事が外国大使等を招いた友好交歓会が開催されるなど、江戸時代から現代に至るまで、我が国を代表する宴遊の庭園である。

4-2 庭園の価値を構成する要素

平成 22（2010）年度改定の「東京都における文化財庭園の保存管理計画」（以下、保存管理計画という。）では、本園の特色に基づき、図 2-35 のように、7つの景観ゾーン及びA～Kの地区に分けた。

本園の「本質的価値を構成する要素」を景観ゾーンに分けて表 2-4 に整理し、本園の維持管理や運営上必要である要素を「本質的価値を構成する要素以外の要素」として、表 2-5 に整理した。

次に、「本質的価値を構成する要素」について、代表的なものをゾーン別に説明する。



図 2-35 景観ゾーン及び地区区分図

- | | |
|---------------------------|-------------------|
| ① 潮入式の大泉水ならびに横堀とその周辺景観ゾーン | ③ 庚申堂鴨場とその周辺景観ゾーン |
| ② 新銭座鴨場とその周辺景観ゾーン | ⑤ 中の御門等とその周辺景観ゾーン |
| ④ 延遼館跡地とその周辺景観ゾーン | ⑦ 外周緩衝植栽ゾーン |
| ⑥ 初倉跡地とその周辺景観ゾーン | |

表 2-4 本園の本質的価値を構成する要素

| ゾーン | 要素 |
|---------------------------|---|
| ① 潮入式の大泉水ならびに横堀とその周辺景観ゾーン | 地形等:潮入の池(大泉水、横堀、舟溜り)、中島、小の字島、八景山、富士見山、御亭山、つつじヶ岡、樋の口山、新樋の口山(樋山)、蛇山 |
| | 護岸・石組・景石:大泉水護岸、中島護岸、小の字島護岸、舟溜り護岸、船着場、横堀護岸、御茶屋周辺の景石、横堀周辺の景石 |
| | 植栽:大泉水周辺の植栽、お伝い橋の藤棚、横堀周辺のマツとサクラ |
| | 建造物:中島の御茶屋、松の御茶屋、燕の御茶屋、お伝い橋、中島橋、中の橋、三間橋、海手小橋、海手お伝い橋 |
| | 遺構:中島の御茶屋跡、松の御茶屋跡、燕の御茶屋跡、鷹の御茶屋跡、汐見の御茶屋跡、観音堂跡、将軍お上がり場 |
| ② 新銭座鴨場とその周辺景観ゾーン | 地形等:鴨池、中島、引堀、馬場跡 |
| | 護岸・石組・景石:鴨場護岸、中島護岸、引堀護岸 |
| | 植栽:鴨場の樹林 |
| | 建造物:大観、小観 |
| ③ 庚申堂鴨場とその周辺景観ゾーン | 地形等:鴨池、中島、引堀 |
| | 護岸・石組・景石:鴨場護岸、中島護岸、引堀護岸 |
| | 植栽:鴨場の樹林 |
| | 建造物:大観、小観 |
| ④ 延遼館跡地とその周辺景観ゾーン | 地形等:管理所横の流れ、延遼館跡の流れ |
| | 護岸・石組・景石:大手門櫛形石垣、延遼館跡の景石 |
| | 石造物:笠雪見灯籠、雪見灯籠、層塔型灯籠、石橋 |
| | 建造物:大手門橋(南門橋) |
| | 植栽:三百年の松、延遼館跡の植栽、延遼館跡の藤棚 |
| | 遺構:延遼館跡、大手門櫛形、井戸 |
| ⑤ 中の御門等とその周辺景観ゾーン | 護岸・石組・景石:中の御門櫛形石垣 |
| | 建造物:中の御門 |
| | 遺構:中の御門櫛形 |
| ⑥ 粕倉跡地とその周辺景観ゾーン | 地形等:内堀、内堀土塁 |
| | 護岸・石組・景石:内堀護岸 |
| | 建造物:旧稻生神社、御蔵道橋、稻荷前橋、内堀門 |
| ⑦ 外周緩衝植栽ゾーン | 遺構:粕倉跡 |
| | 護岸・石組・景石:外周石垣 |
| | 植栽:外周植栽 |

上記以外の本質的価値を構成する要素:敷地全体に残る地下遺構

表 2-5 本園の本質的価値を構成する要素以外の要素

| 分類 | 要素 |
|------------|---|
| 植栽 | 本質的価値を構成する植栽（表 2-4）以外の植栽、花畑、梅林 |
| 公開・活用施設 | 案内板、解説板、掲示板 |
| 休養施設 | 野外卓、縁台、ベンチ、休憩所 |
| 便益施設 | 便所、水飲場、売店、松の御茶屋サービス棟 |
| 管理施設 | 給排水管、電気通信管、高圧受電設備、ロープ柵、転落防止柵、竹垣、ごみ箱、吸殻入、水門（汐留川水門、横堀水門、小水門、新銭座水門、庚申堂水門、内堀水門）、角落し堰、新銭座橋、中の御門橋、水上バス発着場 |
| 管理運営のための建物 | 管理所、倉庫、詰所、資材置場、作業小屋、集積所、売札所 |
| 集会施設 | 芳梅亭 |
| その他 | 可美真手尊像、灯台跡 |

① 潮入式の大泉水ならびに横堀とその周辺景観ゾーン

1) 潮入の池（大泉水、横堀、舟溜り）

大泉水と横堀を合わせて、「潮入の池」と呼ぶ。潮入の池は、水門によって海水を導く「潮入り」の手法を取り入れた池で、潮の干満によって池の水位が変化し水景が変わる。黒ボク石、玉石など様々な石材からなる護岸は、平成 20・21（2008・2009）年度にその一部を玉石護岸として復元した。



大泉水



横堀



舟溜り

2) 中島

大泉水に浮かび、中島橋と 2 本のお伝い橋によってつながれた最も大きな島である。中島の御茶屋が建っている。

3) 小の字島

大小 3 つの小島が並んだ形が「小」の字を描いているように見えることから小の字島と呼ばれる。中島の御茶屋に続くお伝い橋で結ばれている。



4) 八景山

「苑中の八勝を一望する故に名づく」（濱御苑記）とあり、この場所は大泉水方向へは重要な視点場で、中島の御茶屋越しに大泉水を見渡すことができる。



5) 富士見山

大泉水の南側に位置し、大泉水周辺が一望できる重要な視点場である。

かつては、庭園の最南端の隅に位置していたが幕末に砲台を設置した際に、現在の場所に移された。当時は富士山や房総の山々、筑波山まで眺めることができたとされる。



6) 御亭山

潮入の池の東側に位置し、大泉水や横堀、東京湾などが見渡せる重要な視点場である。かつては、横堀の先に遠浅の海が一望できたとされる。



7) つつじヶ岡

横堀の東側にあり、東京湾に面した緩やかな小高い丘である。かつては、美しいツツジの丘であったともされている。幕末には大砲が置かれた。



8) 樋の口山

水門を挟んで「新樋の口山」の向かいにあり、園の南側に位置し、東京湾に面した小高い丘である。かつては「水門の西南にあり眺望絶佳」と記されたほど眺望の良い場所であった。



9) 新樋の口山（樋山）

水門を挟んで「樋の口山」の向かいにあり、以前から「樋基」と呼ばれ「新樋の口の左右樋ありここを云ふとあり」とされ、樋の口山と並ぶ小高い丘であった。かつては「水門近き所、眺望前者に劣らない」と記されたほど、眺望の良い場所であった。



10) 蛇山

横堀と庚申堂鴨場の東にある細長い小山で、現在は鬱蒼とした樹木に覆われている。かつては、ここから船手組の構えの内部を見せないように、また、将軍のお上がり場を見下ろさないようにする目的で、蛇がいることにして立ち入らぬようにさせたという。



11) 船着場

お伝い橋のたもとと、御亭山の西側の2箇所にある。かつての大泉水の舟遊びの際の乗船場であった。大泉水に突き出すように敷石が残されている。



12) お伝い橋の藤棚

大泉水のお伝い橋に架かる。現在は小の字島の上など、お伝い橋の一部にかかるのみであるが、家斉の時代には、お伝い橋全体を覆い、遠景からは回廊のように見えたとされる。



13) 横堀周辺のサクラ

横堀周辺には多くのサクラを見ることができる。明治 16 (1883) 年から大正 5 (1916) 年まで観桜会が開催され、天皇や来賓は横堀周辺を回遊してサトザクラを觀賞した。



14) 中島の御茶屋

大泉水の中島にある御茶屋で、ここから松の御茶屋や燕の御茶屋、大泉水等の雄大な景色を眺めることができ、本園における最も重要な視点場の一つである。

創建は宝永 4 年 (1707) に甲府宰相綱重とされ、太平洋戦争の空襲で焼失したが、昭和 58 (1983) 年度に復元された。



15) 松の御茶屋

大泉水の眺望が良く、水面に映るお伝い橋と中島の御茶屋の水景が美しい場所である。松の御茶屋の名は、周囲に多くの松が植えられていたという説と、御茶屋内部の戸障子類の全てに松が描かれていたという説がある。創建は 11 代将軍家斉の時代であるが、太平洋戦争の空襲で焼失し、平成 22 (2010) 年度に復元された。



16) 燕の御茶屋

お伝い橋を北側から望む場所にある。創建は家斉の時代であり、数寄屋風で茶座敷として使われていたが、太平洋戦争の空襲で焼失し、平成 27 (2015) 年度に復元された。



17) お伝い橋

大泉水にあり、中島の御茶屋と兩岸を結ぶ木橋である。橋から見る大泉水や周辺の御茶屋、築山と、周辺から見る橋と中島の御茶屋はいずれも本園における重要な景観である。江戸期には橋全体を藤棚が覆っていて大変見事な光景であったとされる。



18) 中島橋

大泉水の中島に架かる木橋であり、大泉水や中島の景観を構成する施設として重要である。平成 28（2016）年度に改修工事が行われた。



19) 中の橋

大泉水と横堀との間に架けられている鋼桁木橋で、舟の往來を考慮して、橋脚は高く造られた。中の橋から見る大泉水及び御茶屋群と横堀の景観は素晴らしく、重要な視点場である。平成 19（2007）年度に修復工事が行われた。



20) ^{さんげんぼし}三間橋

横堀の一部に架かる R C 桁木橋で小水門の脇にある。潮入の池周辺の回遊ルート上にある。



21) ^{うみてこぼし}海手小橋

江戸時代に横堀からでた「鳥溜池」の名残と思われる小さな堀に架かる橋である。



22) 海手お伝い橋

汐見の御茶屋近くにあり、細長い横堀を横断する木橋であり、横堀を眺める視点場である。



23) 鷹の御茶屋跡

お伝い橋の手前にあり、庚申堂鴨場寄りの少し奥まった場所にある。藁葺き屋根と土間のある農家風の造りで、家斉が鴨場で鷹狩を行う際の休憩場所として建てられた。太平洋戦争の空襲で焼失したが、現在、復元工事中であり、平成 30（2018）年の完成後は、将軍の鷹狩の様子を伝える施設として使われる予定である。



24) 汐見の御茶屋跡

東京湾を臨む海手にあり、江戸期より海の風景や房総の山々を眺む絶好の場所であった。6代将軍家宣の時代に創建されたが、関東大震災で焼失し、現在は遺構が見られるのみである。汐見の御茶屋では、将軍が漁の様子や船の往来を観覧していた。



25) 観音堂跡

大泉水西側の馬場との間にあり、現在は石段が残るのみであるが、江戸時代には観音堂と鐘楼があった。観音堂の外廻りの長押には、狩野派による額が十二枚あったとされる。



26) 将軍お上がり場

横堀よりも更に北側の海際にあり、歴代将軍が舟で御成りする際にここから上陸した。幕末に鳥羽伏見の戦いに敗れた慶喜が、大坂から船で帰還して上陸した地として歴史的に重要な場所である。昭和 24 (1949) 年のキティ台風で石段下部を損傷した。



② 新銭座鴨場とその周辺景観ゾーン

27) 新銭座鴨場

大泉水の西側、かつて長屋があった場所に設けられ、明治 30 (1897) 年に拡張されて現在の姿になった。江戸時代には鷹狩、離宮時代には鴨猟が行われ、本園における最も重要な施設の一つである。鴨場には、鴨池、中島、引堀、大覗、小覗等の要素がある。平成 8・9 (1996・1997) 年に大覗、小覗、引堀等の修復工事を行った。



28) 馬場跡

新銭座鴨場の東側に位置する。武芸鍛錬の場としても使われた大名庭園の特徴を伝える。現在の延遼館跡にかつてあった表馬場に対して内馬場と呼ばれ、将軍上覧の際の御座所や馬見所があった。



③ 庚申堂鴨場とその周辺景観ゾーン

29) 庚申堂鴨場

かつて庚申堂や田畑があった場所に設けられた鴨場である。江戸時代には鷹狩、離宮時代には鴨猟が行われ、新銭座鴨場とともに本園における最も重要な施設の一つである。

鴨場は、鴨池、中島、引堀、大視、小視等の要素がある。平成6・7（1994・1995）年度に大視、小視、引堀等の修復工事を行った。宮内庁所有の鴨場以外に、現存する鴨場として、新銭座鴨場とともに大変貴重である。



④ 延遼館跡地とその周辺景観ゾーン

30) 大手門跡

宝永4（1707）年に松平綱豊が創建して以来、浜御殿の正門であった。関東大震災で渡櫓が焼失し、現在は石垣のみが残る。かつては築地塀をもつ高麗門形式の表門と櫓門形式の大手門が柵形を構成していた。

大手門と柵形には江戸城の出城としての意味があり、将軍家の別邸であった歴史を伝える重要な施設である。

明治2（1869）年の延遼館竣工に伴い、延遼館表門と改称したが、延遼館解体後の明治25（1892）年に再び浜離宮の正門となった。

大手門には、大手門渡櫓、大手門柵形、柵形石垣等の要素がある。また、大手門周辺として、大手門から本園に入った場所には、井戸や流れがある。



31) 大手門橋（南門橋）

築地川に架かる石張りRC橋である。関東大震災で焼失し、震災後の帝都復興事業により、大正15（1926）年1月に完成した。



32) 延遼館跡

延遼館跡には、江戸時代には浜御殿奉行役人の溜所・長屋・畑等があり、明治になり、近代日本最初の迎賓施設「延遼館」が創建された。延遼館南面の芝庭は、昭和23（1948）年の名勝及び史蹟指定時の指定理由には、「芝生に築山や細流を配した簡素な明治時代の庭園である「北庭」と記されている。延遼館解体後はマツが植栽され、芝生の広場となり現在に至る。

延遼館跡には、流れ、石橋、笠雪見灯籠、雪見灯籠、層塔型石灯籠、藤棚、景石等の要素がある。平成27・28（2015・2016）年度に大規模な遺構調査が行われた。



⑤ 中の御門とその周辺景観ゾーン

33) 中の御門

汐留川に面し、櫛形を有する門である。現在は大手門口に次いで本園の主要な出入口である。明治2（1869）年に延遼館が竣工すると、潮入の池を中心とする御庭への出入り専用の門となり「浜離宮表門」と称された。関東大震災により中の御門橋、築地堀を焼失したが、平成17（2005）年度に復元的に整備された。中の御門には、中の御門櫛形、櫛形石垣等の要素がある。



⑥ 粕倉跡地とその周辺景観ゾーン

34) 内堀

築地川から構内に深く入り込んでおり、各地から運ばれてきた物資を粕倉に保管した後、江戸城に入れるための港湾施設であった。堀には荷揚げ場の石段が残る。水門による水位の調節ではなく、園内で唯一自然の潮汐を見ることができる。

内堀には、内堀護岸、延遼館跡との間の内堀土塁がある。また、築地川から内堀に入る場所には、内堀門がある。



35) 旧稲生神社

稲生神社の宮殿は、18世紀中ごろに建てられたものとされ、明治初年に社殿とともに現在地に移築された。明治27（1895）年の地震により大きく破損したが、明治29（1896）年に再建された。昭和30（1955）年代以降、ほとんど補修されず破損が著しかったが、平成18（2006）年度に保存修理が行われた。



36) 御蔵道橋

内堀に架かる鋼桁木橋である。水上バス発着場と大手門口をつなぐ動線上にある。平成7（1995）年度に修復工事が行われた。



37) 稲荷前橋

内堀に架かる。内堀広場と花木園をつなぐ動線上にある。



38) ^{もみぐら} 朶倉跡

内堀に囲まれた空間である。寛政4（1792）年と寛政7年（1795）に老中松平定信が救荒用の倉庫として建設した。三十五間倉と呼ばれていた。東京都に下賜されて以降は、テニスコートや、都立公園の花壇で使う花苗の培養場として利用されていたが、跡地整備に先立ち、昭和61・62（1986・1987）年度に大規模な遺構調査が行われた。



⑦ 外周緩衝植栽ゾーン

39) 外周石垣

本園敷地の外周を囲っている石垣である。本園創設期より変わらぬ姿を今に伝える。近年では石積の孕みが目立つようになっている。

